

ドイツ啓蒙主義歴史学研究（I—3）

—Johann Christoph Gatterer の世界史叙述における聖書の位置—

岡 崎 勝 世

目 次

- 一. はじめに
- 二. 聖書記述の「非合理の合理化」
 - 1. 第一段階；追従的合理化
 - 2. 第二段階；批判的合理化
- 三. 批判的合理化への変化の諸要因
 - 1. ビュフォンと博物学の発展
 - 2. ミハエリスと聖書の批判的研究の発展
- 四. 小括

一. はじめに

ドイツ啓蒙主義歴史学をめぐる、筆者はこれまで二編の論考を本誌に発表してきた。最初の論考では、ドイツにおける啓蒙主義歴史学の開拓者となったガッテラー（Johann Christoph Gatterer 1727—1799）を研究対象として取り上げた。¹⁾そこでは、かれが生涯にそれぞれ構想の異なる四種の世界史叙述を残したことに注目して、その叙述の変化の意味を考察し、かれがこの変化を通じてそれまでのヨーロッパにおける伝統的世界史叙述である「普遍史」から近代的・科学的「世界史」への転換を準備したこと、しかし同時に、その一貫して文化史に重点を置く叙述内容から、ドイツにおける啓蒙主義的歴史学の一時代を代表するものでもあると結論した。次の論考では、²⁾上の概括的位置づけを各側面から考察する第一歩として、当時までドイツにあってはなお世界史の枠組として受け容れられていた「普遍史」との関係から、かれの世界史叙述の歴史的位置について考察した。すな

わちまず中世的・キリスト教的世界史である「普遍史」の構造を分析し、次いでそれが16世紀以後の「年代学論争」のなかで次第に危機を深めたことを示し、最後にガッテラーの世界史叙述をかかえる論争の最終局面をむかえた18世紀の脈絡のなかで位置付けることを試みた。その結論は、かれは全体として生涯「普遍史」の枠組みを守り、それに固執し続けたが、しかし逆にそのことによって「普遍史」の限界を自ら公衆に対し明らかにすることになり、その結果かれの世界史叙述は「普遍史」の白鳥の歌となったというものであった。

本稿の目的は、上の問題に続き、ガッテラーの世界史叙述と、その基礎にある聖書との関係について考察することである。この側面に関しては、まず、先の二つの論考でも見たように、ガッテラーはその四つの世界史叙述を、すなわち『普遍史教科書』（1761）、『普遍史序説』（1771）、『世界史』（1785）、『世界史試論』（1792）を全てアダムとエヴァから開始していた。³⁾さらに、一貫して初期の人類史を旧約聖書に基づいて叙述してもいた。それは、例えば、かれが最初の著作で天地創造からアッシリアの登場までは信頼できる史料は「モーセの報告のみ」⁴⁾であるとしており、最後の著作でも人類史を4期に区分し、その第1期の1800年間を「アダム＝ノア期」⁵⁾と名付けていることに現れている。この事実、さらにかれが生涯にわたり創世紀元（世界年代）を使用し続けたこと、人類史を6000年間とする伝統的な時間の枠組みを守

り続けたことなどを加えれば、かれが旧来の「普遍史」の側に立つ保守的歴史家であるとし、そしてかれの叙述で決定的役割を果たしたものが常に聖書であったとして、ことさらに議論を行う必要もないように見える。

だが他方、もう一つの見逃せない事実がある。たとえば天地創造についてみてみよう。『普遍史教科書』ではそれを「創世記」の字義通りに受け取り、実際に6日間で創造がなされたとしているし、⁶⁾『普遍史序説』でもこの立場は全く変わっていない。そして6日間における創造の過程を、ほとんど「創世記」の字句通りに繰り返しながら説明している。⁷⁾ 他方、『世界史』では、やはり天地創造は「神の技」であり「最も不信心な者でも……これを真実であると認めないわけにはいかないであろう」⁸⁾と述べ、結論は従来と同じところに落ち着くかに見えるのだが、同時に本書ではこの天地創造を含む聖書の叙述に対し、これを「伝説的歴史」⁹⁾とよんでその叙述に一定の距離を置くようになっているのである。さらに、この立場は6日間での天地創造を否定することにつながっている。かれはこの「伝説」形成時における人類の知的段階はまだ具象語しか存在せず、幼稚な神概念しか持ち得なかった段階であると論じ、そこから「我々なら、今日の練り上げられた哲学的表現を使って次のように言うところである。即ち、神はまず最初に大地を、大地の主要な発展段階が徐々に大地自身の自己展開の過程として実現していくように、創造されたのである」¹⁰⁾と述べるのである。そしてここで言う「自己展開」の過程については、当時の博物学の議論を紹介しながら説明している。¹¹⁾ 即ち、結論的には天地創造を「神の技」として承認しているといっても、ここではそこに至る過程が前期の二著作とは大きく異なっているのである。この新しい態度は、また最後の著作においても変わ

っていない。このようにかれの「聖書」に対する態度が前期の二著作と後期の二著作の間で明らかに相違していることも、もう一つの重要な事実なのである。

本稿は、直接にはこの変化の内容自身と、変化が生じた原因およびその意味を考察することを目的としている。しかし少なくとも筆者には、これを考察することは単にガッテラー個人の歴史観の基礎の動揺を明らかにするにとどまらない意味を持つと思われる。この作業によって、ガッテラーにおいてあらわれる「普遍史」一般の危機の現実の様相を明らかにすることができるのみでなく、ひいては、18世紀における啓蒙主義的思潮のなかで、伝統的な知的世界の枠組が動揺し崩壊していく、その歩みの一プロセスを明らかにすることができると思われるからである。

二. 聖書記述の「非合理の合理化」

上で見たようにガッテラーは、とりわけアッシリアが歴史に登場するまでの人類史の記述においては、その大枠を聖書に、なかでも特に「モーセ五書」によって記述した。この結果、天地創造、アダムとエヴァの楽園追放による人類史の出発、そしてレメクとその子孫による技術の発生を経てノアの洪水に至る時代、さらには大洪水後の諸民族の発生、および、その後アッシリア登場までの時代を導いたヘブライ民族の歴史等々が、どの著作でも繰り返される。

ただ、この場合、注目すべきことが二点あると筆者は考える。一つは、それらの記述の場で、かれは決してただ単に伝統的記述を鵜呑みにしたままで、それを繰り返している訳ではないということである。レイルの言う「非合理の合理化」¹²⁾の努力が常に払われているということである。ガッテラーは聖書に基づいて記述する場

合に、その記述内容に非合理性を自ら感じた場所では、その真実性を読者に納得させるために、あるいはむしろ自ら納得するために、常にその合理的説明を試みるのである。ただ第二にその合理化の仕方には、上の天地創造に関する記述の例の場合で垣間見たように、前期の二著作と後期の二著作の間で顕著な変化がみられるのである。この二期のおおのおおの特徴については、ガッテラーの聖書に対する基本的態度の特徴から、それぞれとりあえず「追隨的合理化」および「批判的合理化」という言葉で表現しておいて議論を進めることにしたい。

まず次節では、筆者が追隨的合理化から批判的合理化への変化と呼ぶ事実について、その内容を明らかにしたい。

1. 第一段階；追隨的合理化

最初に、ガッテラーにおける聖書と前期の二著作、『普遍史教科書』および『普遍史序説』との関係をよく示す議論として、初期人類の長命の問題と、次いで諸民族の形成の問題とを見ておきたい。

よく知られているように、「創世記」には130歳でセツをもうけ930歳で死んだアダムから始まり、ノアが600歳の2月17日に起こった大洪水を挟んでアブラハムに至る系譜が、各々の年齢数を添えて記述されている。これらの人々の驚くべき長寿をどのように考えるかは、既に古代の教父たちの間で議論されており、この問題は古今人々を悩ましてきたものの一つであると言えよう。¹³⁾ こうした問題に対しガッテラーは、最初の著作『普遍史教科書』において、まず聖書の記述を字義通りに受け取り、それを自己の歴史記述に取り入れることで自らの態度を表明する。そしてそれにとどまらず、その上でなぜ人間が1000年に近い寿命を保ち得たのかを説明しようと努めている。ここではかれはその

主要な原因を「神の配慮と計画」¹⁴⁾とするのであるが、それに加えて、大洪水以前の人々の「生活の中庸と単純さ、果物の素晴らしさ、野菜や植物の特別な生産力とその産物、初期人類の肉体的強靱さ、極めて清浄な空気」と肉食とを挙げ、これらの諸条件が「一体となつて」、人間にかかる長寿を与えたのだと論じている。¹⁵⁾ 他方大洪水後は大量の人間・動物たちの死により、清浄だった空気や豊饒だった大地が汚されてしまった。¹⁶⁾ こうして「人類の寿命は6段階を経て次第に短くなり、モーセ時代とその直後の頃に今日通常の最高年齢数の段階に達したのである」¹⁷⁾と述べるのである。

さらにこの大洪水以前の人類の長寿は、そこから提起される問題として、地上の人口に関する議論を喚起することになった。聖書に名前が記された者以外にも1000年近い寿命をもった人々が次々と生まれ、またその各々が膨大な子孫を残したはずだからである。こうしてガッテラーは、「大洪水以前の人類の長命の結果は、当時大地には、それに続くどの時代よりも、また現在よりもはるかに多くの人口が存在していたということである」¹⁸⁾と結論し、その数として1兆3千億という推定数を挙げている。¹⁹⁾

第二の著作、『普遍史序説』においても上の立場は基本的に受け継がれている。ここでは人類の寿命の六段階遞減説について詳述され、創世紀元1656年の大洪水までの900歳以上の寿命を有した第1段階から、70～80歳に短縮したダビデ時代の第6段階までが、聖書によりながら解説されている。²⁰⁾

人口の問題についてもここでは大洪水以後のそれが検討されている。根拠となるのは「出エジプト記」で、ヤコブとともにエジプト入りした一族は「あわせて70人」(1—5)、しかし、出エジプト時には「女と子供を除いて徒歩の男子は約60万人」(12—37)とある数字がそれで

ある。ガッテラーはヘブライ人のエジプト滞在を215年と計算し、その結果16年で人口が倍増することになると考えるが、ただし、ヘブライ人は神の特別の恩寵を受けた人々であるから特に急速に増大したとも考え、2種類の計算をしている。²¹⁾ 1656年の大洪水で生き残ったノアの家族8名を出発点とし、アブラハム時代までのおよそ360年間、16年毎に倍増していく場合と20年毎に倍増する場合である。前者の推定値はアブラハム時代の地上の総人口約3350万人、後者では約210万人となる。しかしこの調子で行くと、イエス生誕（3983年）の頃の地上には天文学的数値の人口が推定されなければならないであろう。ガッテラー自身はその計算をしていないが、しかし「イエス生誕前の諸国は、その後のそれより多数の人口を有していたであろう」²²⁾と結論する。だがそれではなぜ、当時から現在の人口への減少が起こったのであろうか。かれはその理由として以下の諸点を挙げ、その原因を論じている。すなわち、イエス以前の時代の人々の生活の慎ましさに対し、以後は贅沢になったこと、イエス以前には修道院が存在しなかったが、以後は「修道院の多さ」により、またそこでの結婚の禁止によって、人口増が抑制されたこと、カトリック教会の「多すぎる祭日」によって生産が低下しこのため人口も減少せざるを得なかったと論じている。²³⁾ また一夫多妻制の拡大による青年たちの結婚機会の減少や幼児死亡率の増大、性病などの新しい病気の侵入なども挙げている。だがはたしてガッテラー自身こうした「原因」をどれだけ信じていただろうか。というのは、たとえこれらの諸原因によってイエス以後ヨーロッパの人口が減少したとしても、しかし既に『普遍史教科書』でかれが扱った中国や日本、インドなどの場合にはこの理由が当てはまらないこと、しかもそのヨーロッパよりアジアのほうが人口が多いこ

とはガッテラー自身よく知っていたはずだからである。²⁴⁾ 本書では、寿命の6段階遞減説をのべたあとで、1000年に近い寿命について「家父長の寿命としてこれまで理解されてきた年齢は、個々人のそれではなくて、東洋人の場合のように種族全体の、または王朝の存続年数であろうか？」²⁵⁾と付言している。このことは、上で紹介したような強引な議論についてガッテラー自身が不満足であり、かれ自身、別の「合理化」の道も探っていたことを示していると受け取るべきであろう。実際、後の著作では、この、種族または民族の存続年数とする解釈が強調されていくことになるのである。²⁶⁾

以上旧約聖書の族長たちの長寿の問題と、それから派生してくる人口の問題に関するガッテラーの議論を見てきた。そこではまずガッテラーが聖書の記述を字句通りに信じているということが前提にあり、その上で、聖書の記述の「非合理」に対しては聖書の記述に追従しながらこれを「合理的」に説明しようと努力し、さらにはその字句に基づいて現実を説明しようとすら努力している態度が特徴的である。大洪水以前の族長の名前は種族の祖の名前で、年齢は種族や王朝の存続年数かもしれないという『普遍史序説』における指摘にしても、聖書の記述の年齢数をより合理的に説明する仮説として指摘されているだけで、族長たちの長寿への確信がこの時期の根本的特徴であることにはかわりはない。この時期のガッテラーの聖書の記述に対する態度を筆者が「追従的合理化」と呼ぶ所以である。

こうしたガッテラーの態度をよく示すもう一つの例が諸民族の発生に関する議論である。周知のように、「創世記」第9章にはセム、ハム、ヤベテの子孫についての詳細な記述、いわゆる「民族表」が存在する。この表に挙げられている諸民族がギリシア人などの伝える諸民族とど

のように関係しているかも、古来問題となってきたところである。この問題に取り組むにあたり、『普遍史教科書』でガッテラーは、まず、「アダムはユダヤ人だけでなく、全人類の祖」であるとしてプレ＝アダム説を退け、次いで「総じて正しいと言えるのは、……ノアとその三人の息子たちから全民族が発生したということである」²⁷⁾と断じている。そしてこの基本原則の上で、そこに挙げられている人名と、ギリシア人その他の歴史書で伝えられた諸民族との比定の作業を行っている。

こうした立場は、かれの第二の著作『普遍史序説』にも引き継がれている。ただし、ここでは上の原則に加え、後述するようにノアの大洪水が起こったのはインダス流域であったという立場からの立論となっているのだが、かかる諸前提の上で一層大規模な議論が行われているのである。かれによれば箱舟が着いた「アララット山とはパロパミススのこと」であり、従って「大洪水後の人類の世界への拡散の中心地はバクトリアと北西インドの地方であるということになる。」²⁸⁾即ち、この地で「ノアの家族から多数の家族が分離し、時がたつにつれて種族から、さらに民族へと成長していったのである。」²⁹⁾かれらから「多分1809年頃、若干の種族または民族が分離して西に向かった。かれらはシナルまたはバビロニアで有名なバベルの塔の建設を行ったが、これはこれでまた、一層の人種の分離や、……多様な言語の時代への転換の契機となった。」³⁰⁾こうして「創世記」(10—25)にあるようにペレグの時代に「地の民が分かれ」ることになったわけだが、その結果、神のもともとの予定通り、「北アジアとヨーロッパ全域はヤペテ人……に与えられ、南アジアはセム人、アフリカはハム人に与えられ」³¹⁾ることになった。

ガッテラーの「民族表」についての議論は、

単に上のように「創世記」の叙述をパラフレーズすることを眼目としていたわけではない。むしろそれを前提として、歴史上知られている全ての民族が、既に「民族表」に記されていることを証明することがその最終目的であった。この立場からかれが行った「民族表」の分析の一端をヤペテの子孫を例に紹介してみよう。かれは、上でも紹介したように「聖書」に従いつつ、まずヤペテを祖とする人々は北アジアとヨーロッパに広がり、今日に至っていると考える。そして、「聖書」にはゴメル以下ドダニムまで14人の名前が書かれているが、³²⁾かれはこれらの人々を発音の類似性、ヘロドトスの記述などを足掛りにしながら、既知の諸民族に結合していく。³³⁾たとえばゴメル (Gomer) はキンメリア人 (Kimmerier) であり、かれらは後にスキタイ人に追われてカスピ海北岸からゲルマニアへと移動したが、やがてケルト人と混血していった。ゴメルの子孫アシケナズ (Aschkenaz) は黒海 (Pontus Euxinus) 北岸に住んでいた人々で、やがてかれらは西に移動してケルト人、ガリア人、スコットランド人となった。³⁴⁾リパテ (Riphat) はウラル山脈 (Rhiphaea) 地域の住民であり、ギリシア人はこれをスキュティア人とよんだが、かれらはやがてサルマティア人に追われてヨーロッパ北部に移動し、今日のフィンランド人、ラップ人、マジヤール人となった。さらに、トガルマはアルメニア人、プリュギア人、それに多分トロヤ人の祖となった。同様にマゴグ (Magog) はマッサゲタイ (Massageten) を通じ今日のモンゴル (Mongolen) 人に、マダイ (Madai) はメディア (Meder) 人、サルマティア (アマゾン) 人、カップドキア人を経て今日のスラヴ人となった等々と議論が進められる。そして「聖書」には載っていないがヤペテの子孫と考えられるものとして、モンゴル人のほか、タタールまたはトルコ人、ツ

ングース人、満州人、カムチャツカ人を挙げている。³⁵⁾

このようにガッテラーは発音上の類似性を足掛りに、さらにセム、ハムの子孫と、過去に存在が伝えられている諸民族、そして現存の諸民族との比定の作業を行っていくわけである。その内容を逐一紹介する必要はもはやないであろうが、なお中国人(漢民族)と日本人、インディアンについての議論もここで紹介しておきたい。インディアンについては、16世紀以来かれらの起源について様々な議論が闘わされてきたのであるが³⁶⁾、ガッテラーは「あらゆる点から見て、アメリカの主要な人々はアジアからの地に渡ったものである」³⁷⁾と、今日からみて正しい結論を述べている。ただし、北アジア(シベリア)はかれによればヤベテ族が拡大した地域であるから、当然インディアンはその一分枝ということになる。日本人については「若干の中国人植民地の影響を受けて次第に文明化した朝鮮人またはタタール人であろう」³⁸⁾としているから、やはりヤベテ族のうち、多分マゴグの子孫の一員ということになる。中国人については満州人やタタールとは違って「わたしはかれらを、多分セム族であると考えている」³⁹⁾と述べている。中国人の由来がこのように異なるのは、南アジアはセムの子孫が広がった地域であるというかれの考え方がその基礎にあるからである。さらに付言すれば、かれのいう「南アジア」は中近東はもちろん、さらにインドや今日の東南アジアの全地域を含んでいる。セムの子孫ヨクタンの息子ヨバブ(*Jobab*)はジャバ(*Jaba*)人であるとしているからである。⁴⁰⁾このようにしてかれは、18世紀のヨーロッパ人に知られていた地球上のすべての民族の出自を、「民族表」によって明らかにしたと信じたのである。

これらの議論には一部今日から見ても正しい

と考えられるものもあるが、しかしその大部分は誤りである。今日では「民族表」は紀元前600年頃に成立したものと考えられており、当時のユダヤ人の知り得た世界、具体的には西アジア世界という歴史的世界を前提にして、「聖書」の伝える民族名とギリシア人その他の伝えるそれとの比定の作業が行われている。⁴¹⁾これに対し、ガッテラーの作業が宗教的確信から出発していることが、誤りの主要原因と言えよう。上にみたように、かれは「聖書」の「民族表」が地球上の全民族の祖先の表であることをまず疑いようのない前提とし、その上で18世紀までにヨーロッパ人の視野の内にはいつてきた世界、即ちアジア、アフリカに“新大陸”までを含む全ての世界の諸民族の祖先を、その表の中に見いだそうとしているのである。そしてその結果によってあらためて前提が正しかったことを確認し、かくして「聖書」の記述の「合理化」をしようとしているのである。

最後に筆者はまた、ノアの大洪水はインダス流域で起こり、箱舟がたどりついたアララット山とはパロパミスであるとするガッテラーのユニークな議論も、こうした「追隨的合理化」の一例であると考えている。大洪水後の人類拡散の中心地を「バクトリアと北西インドの地方」⁴²⁾とすることは、ユーフラテス流域とアルメニアのアララット山とする伝統的見解に反してはいる。⁴³⁾しかし聖書の記述ではそのように明示的に限定されているわけではないから、ガッテラーの説は聖書に反しているとは言えないであろう。他方、メソポタミアから東に移動させて北西インドの地に人類拡散の中心地を置く理由については、単に奇をてらうためでないとするれば、それによって何らかの問題が解決されるからであると考えざるを得ないであろう。そしてその問題とは、インドや中国の歴史の古さや人口の多さ、さらにはインディアンのアメリ

カへの移住などの問題であり、これをより「合理的」に説明することができるとガッテラーが考えたが故であろうというのが筆者の推定である。とりわけ中国の歴史の古さの問題は、17世紀以後ヨーロッパで大きな問題となっていた。⁴⁴⁾ ガッテラーは『普遍史教科書』で、一方で中国には大洪水以前から人間が住んでいたとしながら、しかし、大洪水でかれらは滅んでしまったと考えた。⁴⁵⁾ 他方、大洪水後についてはウイストンをはじめとする学者たちの議論を、即ち、「アララット山から下った直後にノアはかれの3人の息子たち、セム、ハム、ヤペテをはなれ、かれのもと若い息子たちをつれて大洪水以前に住んでいたことのある中国に行き、その地で最初の王となったが、中国人はかれを伏羲とよんでいる」⁴⁶⁾ とする主張を紹介することで、自らの立場を示唆していた。この立場は『普遍史序説』では修正されて、中国人を「多分セム族」とするが、ここでも伏羲が西方からきたという中国人の伝承を重視し、中国人はもとオクソクに住んでいたことについては「信じられないことではない」⁴⁷⁾ と論じている。このようにガッテラーは、いずれの場合にもノアの大洪水に極めて近接した時期に中国人の起源を求めているのであるが、この場合、洪水後の人々の活動の場をできるだけ中国に近づけることは、中国の歴史の古さを「合理的」に説明する一つの有力な方法であったと考えられるからである。

2. 第2段階；批判的合理化

ガッテラーと聖書の関係が変化するのは、上でも述べたように、『世界史』(1785) からである。その典型的な例として、本書におけるノアの大洪水に関する議論を見ておこう。議論の冒頭で、かれはまず次のように述べている。「かなり以前から、そして新たに再び鋭敏な学者に

よって気づかれた事実、そしてまた原語を知っている人なら誰でも、しようと思えば一目で確かめることができる事実、それはモーセの最初の書物が二人または三人の異なった著者の伝承の集成から編まれたものであるということである。ある伝承では神についてエローヒームの名が、他のものではエホバの名が、両伝承の追加である第三のものでは時々エホバ・エローヒームの名が使用されているのである。」⁴⁸⁾ この言葉から、ガッテラーはこの時点でなお「モーセ五書」がモーセ自身の手になるものであると信じていたこともうかがえる。しかしそれより重要なことは、ガッテラーが以前の二著とは立場を変えて、聖書の批判的研究における一画期となった「鋭敏な学者」、アストリュクなどによる最新の理論をここで受けいれていることである。⁴⁹⁾ 即ち、筆者はガッテラーが聖書に新たな形で合理的説明を与えようと試みる段階を「批判的合理化」の段階と呼ぶのであるが、この第2段階への移行の背後には、ヨーロッパにおける聖書の批判的研究の発展が直接関与していたのである。⁵⁰⁾ かれはこうして、より古く、従ってまた最も根本的な伝承と考える「エホバ伝承」(今日の「ヤーウェ資料」)を、自らその語学力を駆使して「創世記」から抽出していくのである。そしてその結果ノアの洪水に関して導き出された結論は、従来のかれの主張とは全く異なったものとなった。かれがここで行った変更の内容は、大きく以下の三点にまとめることができるであろう。

まず第一点は、大洪水が全地を覆ったことを否定し、「洪水はただ高く覆っただけで、極めて高い山々までを覆ったわけではないし、まして山の上15エルレまで高まったわけでもない」⁵¹⁾ とするようになった。この主張の根拠の第1は、上で紹介したガッテラー自身の文献批判の結論である。すなわち「創世記」第7章の

19節、「水はまた、ますます地にみなぎり、天の下の高い山々は皆おおわれた」はエホバ伝承であるが、次の20節「水はその上、さらに15キュピッドみなぎって、山々は全くおおわれた」は、エローヒム伝承（今日の「祭司資料」または「P資料」）だとするかれの分析結果がその根拠なのである。もっとも、今日ではこの19節も「P資料」とされているから、この点ではガッテラーの判断は間違っていたことにはなるが、しかしそれはそれでまた、かれの結論を強めることにはなるであろう。しかし、前節で紹介したように聖書の叙述を字義通りに信ずるのではなく、上で見られるように聖書の叙述自体を批判的に検討し、文献批判を通じて事実を追求するというガッテラーの態度は、これまでみられなかった新しいものであることをここでは特に強調しておきたい。次に大洪水が全地を覆ったことを否定する根拠として、ガッテラーはさらに3つの経験的事実を挙げている。第1は、全てではなくとも山々が水没する程に水位が上昇することは、40日間の降雨のみでは経験上不可能であり、もしあるとすればこれに加えて「大洋があふれること」⁵²⁾が必要であり、このように豪雨による洪水と海嘯がかさなる場合しか考えられないこと、ところが第2に、地球全体に40日間雨が降り続けることは「物理的に不可能」⁵³⁾であり、また第3に、全大陸の全ての海岸で大洋があふれることも不可能である。⁵⁴⁾従って聖書にある大洪水はノアが住んでいた地域で起こった局地的なものであるとしなければならないであろう。つまり「それだけでなく洪水を起こしやすいインダスとカンジスによる巨大な洪水だったのであり、両河の水流がインド洋に阻まれたことが、40日の降雨を原因とする洪水を上述の水位にまで押し上げることを助けたのである。」⁵⁵⁾この言葉と、前期の著作である『遍史序説』の次の断言とを比べるな

らば、かれの立場の大きな変化がよくわかるであろう。すなわちそこでは「大洪水が全地を覆ったかどうかについて、私はつい最近まで疑っていた。つまり敢えて肯定も否定もしなかったのである。しかし今日私はそれは全地を覆ったと確信している」⁵⁶⁾と述べていたのである。またこのあらたな議論では、前節で紹介した「追隨的合理化」の場合とは立論の方向が逆転していることにも注意したい。先に紹介した初期人類の長寿に関する議論では、まず聖書の記述にある年齢数を前提にし、そこから人類の寿命5段階通減説を導きだして今日のわれわれの寿命を説明し、またこれを基礎に地上の人口を論じていた。しかしここでは、「洪水伝説の原著者は疑いもなくそれが全地を覆ったと考えていた」との認識を一方で示しながら、「しかし今日では全地を覆う洪水など不可能だということは容易に証明できる」⁵⁷⁾として、先のような経験的事実をあげているのである。ここでは聖書は議論の前提ではなく批判の対象に、すなわち経験的事実と矛盾するかどうかによってその真実性を判断される「文献」となっているのである。ただしここでの議論については、最後に、洪水自体の事実性に関してはガッテラーが何ら疑っていないことにも注意しなければならないであろう。むしろこの議論の結果その規模と場所が限定されたことにより、大洪水が歴史的事実であることのほうは経験的事実の範囲内で「合理的」に説明されたことにはなるであろう。少なくともガッテラーが自ら大洪水の合理的説明を与えたと信じたであろうと、筆者には思われるのである。

第二の重要な変更は箱舟に乗ったものについての考え方の変化である。ガッテラーは『普遍史序説』では、「この舟には1)ノアの家族全員、2)四つ足の獣、鳥、地を這う昆虫たちも、純粋な獣は雌雄七匹ずつ、純粋でないものは

各々一番、3) あらゆる生活必需品、および、
…4) 地上での新たな栽培に備えてあらゆる種類の道具、器具類が乗せられていた」^[58]と述べていた。当時かれは大洪水が全地を覆ったと考えていたから、箱舟にはこのようにノアの家族8名と地上のあらゆる動物が乗っていなければならなかったのであった。しかし上でみたように、『世界史』では大洪水は局地的なものと考えられるに至った。そこでかれは言う；「今後は、人のよいノアに出来もしない旅をさせて全大陸の隅々にまで行かせ、野生および家畜の動物や地上の昆虫を捕まえさせたり、…箱舟の中で1年間世話をさせたりすることは、もはや必要ないのである。ノアが集めたのは、ただかれのいた地域におり、かれが知っていた動物たちだけだったのである。」^[59] このように乗せるべき動物の種類と数が大幅に減少し、空間に大きな余裕ができた箱舟には、今度はもっと多くの人間が乗り込むことになる。というのは、ノアにしるセム、ハム、ヤペテにしる既に大洪水のときには多くの子供たちを持っていたはずで、^[60] それはもはや種族にまで成長していたはずだからである。「ノアという名前を種族の祖のみを指すものとしてもよいし、またかれを祖とする種族であるとしてもよいと考えられるが、……舟で救済されたのはこのノア家または4家族からなる種族だったのである。ノアの舟には百名以上の人間が乗るのに十分な空間があった。」^[61] こうしたあらたな一連の議論も、聖書の記述の「合理化」であることには注意しなければならないであろう。それは一方で地上の全ての生き物が乗せられるかどうかという問題について、実は北西インドに生息する動物たちだけであったとすることで「合理的」説明を与えようとしたものであるし、他方箱舟に乗ったのは「ノア家または4家族からなる種族」としたことは、洪水を局地的出来事としたこととも

結び付いて、大洪水後の人類の歴史についてもあらたな「合理的」説明を可能にするものであるからである。ただし、この最後の点は次の第3の変更と結びついているので、まずこの問題をみることにしよう。

『世界史』における重要な変更の第三点は、大洪水で生き残ったものについても意見が変わったことである。インド北西部以外の地に棲息を続ける動物たちは、ここでは問題にする必要はないであろう。ここでの問題は人類である。ガッテラーの主張は、「今後はどのようにして8名の人間からたった二、三百年間でかくも広範な地域に何千万人にもふえることができたのだろうか、などと思い迷う必要はない。大洪水で死んだのは、ただガンジスとインダスの流域に住んでいた人々だけだったのである。……洪水ではおよそ10万人の人々が命を失ったと推定されるが、しかしなお10万人余りは南アジアの他の地域に残っていたのである」^[62] というものである。さらに、ノアの子孫たちは大洪水後しばらくはインドで一緒に住み、その後次第に西方に移動するのだが、「そこではかれらは、ほとんどどこにおいても、大洪水に何ら苦しむことのなかった人々に出合った。」^[63] なぜなら、「アダムの子孫は、大洪水の時代には、人口はまだ千万単位にはなっていなかったであろうが、多分南アジアの大部分の地域、西方ではエジプトに至るまで広がっていた」^[64] からである。こうしてノアの大洪水前後の人類史は大きく書きかえられることになった。すなわち大洪水で滅びたのは北西インドの人々だけであり、他の諸地域の人々はそのまま存続したのである。もっとも、これらの各地で存続した諸民族については聖書は伝えていない。「というのは、ヘブライ人の伝承はノア家の祖先のこと、つまりセツを祖とする大種族のうちの一分枝しか知らないからである。」^[65] そして聖書が伝えるの

は、大洪水後についても、こうした限定された意味でのノアの子孫たちの情報のみなのである。ただし、かれらは箱舟から出てきたときには既にノアの名を冠する「種族」をなしており、8名ではなく多数の人口を擁する強力な一集団であった。従って、やがてこのノアを祖とする種族の行った西方への移動は、そこに支配と被支配の関係を生み出していくことになる。「ノア族 (Noachiden) はあちこちで原住民と混血したが、また移動中に多くの地方で原住民を下僕や下女とし様々な奉仕をさせた。かくして次第に近東地方において極めて多数の隷属民が成立することになった。アブラハム家だけで1200名を越える僕たちがいたほどである。ノア族はこうして、若干の原住民種族に対して一時支配権を獲得したのであった。」⁶⁶⁾

以上の三点は、かれの第四の著作である『世界史試論』でも繰り返されており、もはや変わることはなかった。⁶⁷⁾ しかしそれでは最後に、かれがその前期であれほど熱意を込めて取り組んだ「民族表」の分析、大洪水後の諸民族の発生に関するかれの議論は、この新たな立場から、どのような変更を加えられることになるのであろうか。この問題については、まず、前提そのものが大きく変わってしまったことに注意しなければならない。上でも述べたように、「前期」または「追隨的合理化」の段階におけるガッテラーは、ノアの洪水によっていったん人類が8名に減少したこと、そして「民族表」に記された系譜が、18世紀のヨーロッパ人に知られた全民族の出自を予言しているとの立場に立ち、その上で、古代ギリシア以来伝えられた諸民族と「民族表」に記載された人名との比定の作業を行ったのであった。ところが『世界史』以後の「後期」または「批判的合理化」の段階のガッテラーは、ノアの大洪水をガンジスとインダス流域の局地的な洪水と限定して、しかも

「民族表」にある系譜は「セツを祖とする大種族のうちの一分支しか知らない」ものと局限してしまったのである。したがって、この洪水を免れた人々が各地に存続していたことになるし、実際、ガッテラーは、「ノア族」が移動を開始したときに各地で大洪水を免れた「原住民」に出会ったと述べるのである。それではこれらの「原住民」自体はどこからきたのであろうか。これについて確実なことは、かれらはいずれもアダムの子孫であると、かれが考えていたことだけである。⁶⁸⁾ かれは『普遍史教科書』でプレ・アダム説の明確な否定を行い、その後『普遍史序説』、『世界史』、『世界史試論』の全著作でも、一貫してその叙述をアダムとエヴァの創造から始めているからである。しかしこれらの「原住民」たちはアダムの子孫のどこにつながるのであろうか。多分「セツにつながる大種族」のうち聖書に記載されていない別の分支に属するか、あるいは、やはり聖書に記載されていないアダムの他の子孫につながるのかのいずれかであろう。いずれにしる確かなことは、「前期」においてかれが展開した壮大な民族発生に関する議論が、ここでは全面的な再検討を迫られていたということである。しかし現実にはかれはその再検討を行っていない。行ったのは、ただセツに発する大種族の一分支と限定された「ノア族」の分析であり、ノアに発する諸民族のインドからの移動の記述だけである。⁶⁹⁾ そしてこれに属さない「原住民」に関する議論はどこにもみられないのである。聖書に書かれていないとする以上議論できなかったとも言える。⁷⁰⁾

このように、ガッテラーは「原住民」に関し、これを聖書に基づいて議論することを結果として放棄しているのであるが、実はその事実自体に大きな意味が存在すると筆者は考える。なぜなら、この議論を通じて伝統的な「普遍史」の

重要な一要素が、その内部から突き崩されたと
言えるからである。ノアの家族8名からの人類
史の再出発、従って「民族表」が地上の全人類
を説明するものであるとの確信は、「前期」に
おけるガッテラー自身においてもそうであった
ように、神の英智と計画を明らかにしようとし
た「普遍史」においてはその最も重要な一要素
であった。しかしいまそれが否定されたので
ある。そして、「ノア族」以外の民族について
は聖書に基づいて説明することができないこと
をガッテラーが示したことにより、以後聖書の
限界を越えて、あるいは聖書から離れてこの問
題を論議する道がひらかれたことになるからで
ある。先にかれがペレールの「プレ・アダム人
説」を否定したことを紹介したが、ペレールと
は角度は相違するものの、結果的には同じ道
を、すなわち民族に関する議論において聖書の
呪縛を内部から打ち破る道を指し示すことにな
ったからである。⁷¹⁾

さらにこのことは、ガッテラーにおける「批
判的合理化」の作業全体にも当てはまると筆者
は考える。なぜなら、その作業を押し進めれば
進めるほど、決定的根拠としての聖書の地位が
揺らぎ、さらには乗り越えられていくことにな
るからである。なるほどガッテラーはなおアダ
ムとエヴァから歴史叙述を開始し、また年号を
創世紀元で記してはいる。しかし他方すでに紹
介したように、6日間での天地創造が否定さ
れ、ノアの大洪水による8名からの人類史の再
出発が否定され、従って「民族表」も「ノア族」
のみのそれと限定された。さらにいわゆる四世
界帝国論も否定され、⁷²⁾そしてこれらの諸要素
の否定の上に立って、インド、中国など旧来の
「普遍史」では叙述されなかった諸地域を含む
世界史叙述が、まず『世界史』で行われ、また
『世界史試論』に引き継がれていくのである。し
かもこれらの否定された諸要素はいずれも中世

的・キリスト教的世界史たる「普遍史」の基本
的構成要素にほかならなかったのである。

本書以後、ガッテラーはその著書で従来の書
名に採用してきた「普遍史(Universalhistorie)」
の名称を捨て、「世界史(Weltgeschichte)」の
名称をあらたに採用していくのであるが、それ
はまさにこうした内容上の大きな変化をかれ自
身が強く意識しており、名称の変更はこうした
意識の反映なのであらうと筆者は推測してい
る。⁷³⁾すなわちガッテラーの「批判的合理化」
の努力は、こうして、「普遍史」の自己否定へ
の歩みをも意味していたのである。

三. 批判的合理化への変化の諸要因

上で述べた「追隨的合理化」から「批判的合
理化」への変化はどのようにしてもたらされた
のであろうか。筆者は、既に別稿で論じたよう
に、その原因は根本的にはまず第1に「大航海
時代」におけるヨーロッパ人の活動にあり、こ
れによって「普遍史」がその対象としていた「世
界」の狭小性の問題が明らかになってきたこ
と、および第2にルネサンス、宗教改革の運動
の中から聖書の批判的研究が発展してきたこ
とに求められると考える。⁷⁴⁾ただしこの2点はと
もに具体的局面においては様々な形態と内容を
もって現れる。これらのうち本節では第1の問
題圏に属するものとして博物学、とくにビュフ
ォンとの関係、第2の問題圏に属する問題とし
てドイツにおける聖書の批判的研究の発展、と
りわけその代表者としてのミハエリスとガッテ
ラーとの関係について考察を行うことにした
い。

1. ビュフオンと博物学の発展

「今日、博物学はかつてないほど盛んである。大
半の学識者が研究や趣味の対象にしているだけ

でなく、民衆にも広く博物学への関心が広まっており、それが日々ますます強くなっている。」これはビュフォンの『博物誌』に協力者したドーバントンが『百科全書』の「博物学」の項で述べた言葉である。そしてこの博物学の隆盛は「大航海時代」におけるヨーロッパ人の「世界」の拡大がもたらしたものであることは、今更指摘するまでもないであろう。17世紀をガリレオやニュートンに代表される自然哲学の時代とすれば、18世紀は同年に誕生した二人の博物学者リンネ（1707-78）とビュフォン（1707-88）に代表される、まさに「博物学の時代」であった。⁷⁵⁾ こうした時代的風潮にガッテラーも決して無縁ではなかった。というより、かれはむしろ積極的にこれと取り組み、そしてそれをかれの世界史記述の基礎に取り込もうと努力しているのである。

ガッテラーは「追隨的合理化」の段階の著作である『普遍史序説』において、先にも引用したようにノアの箱舟には「四つ足の獣、鳥、地を這う昆虫たちも、純粋な獣は各々七番、純粋でないものは各々一番」が運び込まれたと主張した。そこではこのようなことが実際に可能と考える根拠を次のように説明している。まず第1は箱舟の大きさで、それは「各階が15,000平方エルレの広さを有し」⁷⁶⁾ しかも三階建てであり、極めて膨大な空間を有していたこと、第2に運び込まれた動物の種数が意外に少ないことをあげている。そして、特に第2点に関する説明として次のようにのべている。「一般に動物の種類三百という数が言われているが、その数と舟に運び込まれた動物の数とを比べて舟の大きさを説明する場合、まず第1に水中に住む全動物と変種とがその数から除外されなければならない。ともあれ、種の数の決定については私はそれを自然研究者に委ねるのであるが、ビュフォンが15の属と孤立的な9種に動物の種

の数を削減したことが理由あるものだとすれば様々な疑問や、とりわけノアがどのようにして箱舟にすべての種を集めることができたのか、また全ての動物が一年と十日間箱舟のなかで生きのびるための、かかる多数の部屋をどのように箱舟に作り得たのかということの説明の困難性も、たいした問題ではなくなるであろう。」⁷⁷⁾ 見られるように、ビュフォンが「追隨的合理化」のために援用されているのである。⁷⁸⁾

それでは、ビュフォン自身はどのような議論を行っていたのであろうか。ガッテラーの『普遍史序説』が出版されたのは1771年だが、ビュフォンの『博物誌』（1749～1804, 44巻）のほうはこの年までに『四足獣類の博物誌』（1745～67, 15巻）の部分で完成している。そしてビュフォンはこのなかでかれが記述した200種類の四足獣類を38科に限定した。⁷⁹⁾ このことは、ビュフォンに即していえば25の「いくつかの種を集める属」、および13の「それだけで一つの属をなす孤立した種」という表現になるのだが、このいずれにも新大陸に固有の種が含まれている。またその第14巻（1766）には、「ビュフォンの作品の絶頂であると同時に総合である」⁸⁰⁾ とされる「動物の退化について」が発表されている。ここではかれは現存の動物相の多様性を「退化」の観点から説明しようとし、そこから「自然の初期」に逆上って「新大陸と旧大陸がまだ分離していなかった時代」を想定し、この「はるか昔の状態」として「三八の科に限定された二〇〇種の四足獣類を思い描いてみる必要がある」⁸¹⁾ と述べていた。この記述は、「進化のメカニズムの問題を別とすれば、考え方の大筋は明らかに進化論である」⁸²⁾ とも評価されている。しかし、かれのこの議論はガッテラーにおいては別の意味を持って受け取られている。即ちガッテラーが箱舟に入った四足獣について、「純粋な獣は各々七番、純粋でない

ものは一番」と述べたとき、そこでは明らかにビュフォンの議論が下敷きとされているのである。というのは、ノアの箱舟に運び込まれた四足獣を「15の属と孤立的な9種」とする数値は、上のビュフォンの分類のなかから新大陸に固有な種を差し引いた数値にほかならないのである。⁸³⁾ 一方ノアの洪水は創世紀元1656年に発生したと計算されていた。そしてここからあとは筆者の推測なのであるが、そこでガッテラーはこの1656年までに新大陸が旧大陸から分離したと考え、またビュフォンのいう「退化」もある程度進み、その結果この時代までには創造された時の「純粋な獣」と並んで、「純粋でない」獣たちも旧大陸に棲息していたと解釈したのではないだろうか。⁸⁴⁾ こうして四足獣類については「15の属と孤立的な9種」がこの「純粋な獣」の種の数でありこれら24種が七番ずつ、さらに何種類かの「純粋でない」獣が一番ずつノアの箱舟に乗ったと考えたのではないだろうか。そしてこの推測が正しければ、昆虫や鳥類全体を含めても、これらの動物たちは普通程度の動物園の施設におさまるであろう。また箱舟はなるほどそのために十分な広さを有していたのである。従って、こうなればたしかに、箱舟に乗った動物たちをめぐる説明の困難さも氷解することにはなろう。⁸⁵⁾

筆者のいう「批判的合理化」段階の著書である『世界史』(1785)においてガッテラーは、「われわれの今日の物理学、化学、博物学」による大地の成立に関する説明に、「創世記の叙述は極めて精確に一致している」⁸⁶⁾と述べている。そして聖書の記述を次のようにパラフレーズしてみせる。創造直後の大地は、「以後のそれとは異なっていた。大洋が大地を完全に覆い、そのおもてで(花崗岩の高山からなる山脈の間で)不透明な蒸気が神の送る風によってわき立っていた。…知られている大地の生き物の最初

は海の貝と水生動物であるが、今日なおそれらが海の底で生きていたと同じ姿で、…陸地の地層に化石化し石灰化して残っているのがみられる。これらの化石や石灰岩の山脈、あらゆる地方にある極めて多くの火の消えた火山、強い炎で溶かされ、水によって冷やされてできた鉱石や金属などが明瞭に示していること、それは水の下にある地殻の発火が、今日の大地の姿を作り出してきたということである。何千年とも知れぬ間に変質をとげてきた無数の海の貝や水生動物、海草などの遺物が、この創造的燃焼の火口なのである。すなわち何千年もの間に、その遺物から砂利や、その発火性によって特定の条件で水の下でも発火することのできる鉱物などが膨大な量にわたって生成されてきたのである。沸騰している地殻から沸き上がる炎の流れが全地を覆っていた海水の一部を飛散させ、軽くて立ちのぼる蒸気に変えた。こうして蒸気と水との分離が行われた。…そうこうしているうちに、凸凹の地表をもった陸地が地下で変成をとげた埋蔵物もろとも…地表全体を覆っていた海から姿を現した。そして最初から存在していた火崗岩の高山からなる山脈に、石灰岩の山脈が加わった。ヘブライの伝説がここで初めて、冷却作用を行った降雨ののちに、植物界を生じさせているのは事柄の本質にかなったことである。すなわちその伝説は太陽と月、星に、生成された透明な空気をとおして、陸地や大洋のうえにその光線を妨げられることなく投げかけさせ、その後には大空と水と大地を生物によって満たさせているのである(これらの生物はすべて最初の創造のときからの大地への神の持参金であり、卵の中のチョウのように、成長せずまた見分けられない形で潜伏していたのである)。こうしたことの終わりに、伝説は最初の夫婦を、…エホバ自身に厳かに創造させ、大地に置かせている。」⁸⁷⁾

ビュフォンは1778年、『自然の諸時期』を出版した。本書では、かれは初期の考え方を修正して火を重視する立場に変わった。⁸⁸⁾ 新しいビュフォンの地球史は一言で言えば冷却の歴史であった。その考え方を要約すれば以下の通りである。⁸⁹⁾ まず地球は急速に運動する、高温で溶解した物質の球として誕生し、その後徐々に冷却を始める。この冷却により地球の表面には穴や波形や凸凹ができ、表面下には空隙や空洞や泡が生まれる。この凸凹が「原始山岳（第1次山岳）」となる。⁹⁰⁾ またこの冷却のなかで鉱物資源も形成される。次いで「原始海洋」が生まれる。原初においては高温で気化された様々な物質を含み、太陽光線も通さなかった気体の中から、冷却によって様々な物質が地表に落下してこれを形成するのである。原始海洋は、第1次山岳の山頂以外は全てを覆ってしまう。この原始海洋はその浸食・堆積作用で新たな陸地の形成者となるが、同時に生命体の形成者ともなる。すなわち、浸食作用で地表下の空洞の天井に穴を開け、ここに海水が流れ込むことで水位が下がっていく。すると海底に堆積されていた物質が水面上に姿を現して陸地を形成していくのである。他方、まだ熱い海水の中で貝類などの生命体が生まれ、これが海底に石灰質の堆積を作っていく。さらに陸上にも植物が発生して、これらは石炭のもととなる。さて水位が一層低下するにつれて陸地も次第に大きく姿を現し、この陸地では第2次山岳が成立していく（第1次山岳の山頂には化石がないが、第2次山岳の山頂には貝の化石があるのはこのためである）。原始海洋の海岸では火山も発生したが（火山は堆積した可燃物質が水との接触で自然発火して発生する）、原始海洋が後退したところでは火山も死んでいく。このようにして地表が次第にわれわれの知っている様相を呈してくる。ビュフォンによれば、最後に、人類が現れるの

はこうした地球の諸時期のなかの最後の第7期においてなのであった。

ガッテラーが「創世記」のパラフレーズをおこなうにあたり、「博物学 (Naturgeschichte)」と「創世記の叙述は極めて精確に一致している」としていたことは上で紹介した。しかしガッテラーはそこではその「博物学」が誰のものを明示していなかった。しかしここまできると、生物がすべて「創造」の最初から「潜伏」していたという「前成説」⁹¹⁾ 的な言葉を除けば、ガッテラーの記述とビュフォンのそれがほとんど逐一对応していることが明らかとなったと考える。それでは『自然の諸時期』(1778)におけるビュフォンの新しい地球史を受け入れたことが、ガッテラーにとってどのような意味を持ったのだろうか。先にビュフォンの『博物誌』のうち、『四足獣類の博物誌』(1745～67)がガッテラーの『普遍史序説』(1771)においては「追隨的合理化」のために援用されたことを指摘した。それに対し、ここで問題となるのは『自然の諸時期』(1778)とガッテラーが『世界史』(1785)において「批判的合理化」の立場に移行したこととの関係いかんである。この問題に関しては、ビュフォンが極めて大きな影響を与えたと考えざるを得ない。「批判的合理化」段階における特質の一つは、先にノアの大洪水についての議論のところで述べたように、経験的事実と矛盾するかどうかによってその真実性が判断される「文獻」として聖書を扱うという態度であった。そして、この「経験的事実」の具体例として極めて大きな役割を果たしたのもこそ、「博物学」の提供する「事実」に他ならなかったからである。その最も顕著な例は地球の歴史を7万5千年とするビュフォンの議論である。かれは、ガッテラーの『普遍史序説』(1771)後ほどなく、また『世界史』(1785)までの間に、『補遺』第1巻(1774)において鉄の冷却

に関する詳細な実験を発表した。そしてこの実験を基礎に、その第2巻(1775)に収められた「地球と惑星の冷却に関する研究」において、地球が形成されてから現在の温度になるまでの地球の年齢として74,832年、また地球上における生命体の発生を地球誕生後36,000年という数値を発表していた。⁹²⁾ この数値は入念な実験に裏打ちされたものでもあったから、少なくともビュフォンの地球史を受け容れた場合には、この数値は動かしがたい「事実」と考えざるを得なかったであろう。むしろこれが極めて控え目な数値たることはビュフォン自身が暗示していたし、発表はしなかったが、実際1千万年は越えると計算していたのである。⁹³⁾ かれがこの数値を故意に控え目にした理由は、まず第1には教会に対する配慮であったが、また「この数値でさえも一般公衆(人類が6千年続いたとまだ考えていた)にとっては気の遠くなる」⁹⁴⁾ 数値だったからである。いや一般公衆だけではない。本稿との係わりで最も重要なことは、この数値はガッテラーが『普遍史序説』まで堅く信じてきた「普遍史」の年代的枠組、即ち人類史六千年という旧来の枠組を否定する数値であったということでもある。人類史6千年という数字は、もちろん「創世記」に基づいた、6日間での天地創造を紀元とする創世紀元の年数からきている。17世紀の年代学者ペタヴィウスがキリスト紀元1年を創世紀元3984年とし、またイギリスのアッシャー、フランスのボシュエがともにそれを4004年と主張したが、いずれにしろヘブライ語聖書に基づくかぎり天地創造がキリスト生誕のほぼ四千年前に落ちつくことになるのである。そしてここまでガッテラーが採用してきた年代はこのうちのペタヴィウスの体系に他ならなかったのである。⁹⁵⁾

実は、この問題に関してもビュフォンが一つの解決策または妥協点を用意してくれていた。

かれは地球の誕生を7万5千年前、生命の発生を4万年前に置きはしたが、人類についてはこれを6千年～8千年前としており、この6千年という数字は上でも述べたようにヘブライ語聖書の天地創造時に、8千年という数字は七十人訳聖書の示すそれに対応しているからである。ビュフォンはこのような地球や生命体の誕生と人類の誕生とを明確に区別し、その上で人類史にのみについては6千年という数値をそのまま認めたのである。ガッテラーの『世界史』における最大の変化の一つは、かれが6日間での天地創造という聖書の表現を否定するに至ったことであった。「はじめに」で引用した「神はまず最初に大地を、大地の主要な発展段階が徐々に大地自身の自己展開の過程として実現していくように、創造された」や、また本節で引用した、あいまいな表現ではあるが「何千年とも知れぬ間」とか「何千年もの間」と訳しておいた言葉は、⁹⁶⁾ いずれもそのことを表している。そしてこの言葉を記しているガッテラーの脳裏には、当然この7万5千年という数値が浮かんていたはずである。しかもビュフォンの妥協案は極めて巧妙であった。人類史6千年の枠は認めながらも、そしてこちらのほうこそがビュフォンの狙いであったが、6日間での天地創造の観念を捨てることを迫っていたからである。そしてガッテラーはこのビュフォンの提案を承認せざるを得なかったのである。しかしこれを承認することは、聖書の記述を文字通りに信じてきた、これまでの「追隨的合理化」の立場を放棄することを意味する。他方また、この立場は聖書の記述に対する部分否定であって決して全面否定ではないことも重要である。このようにしてガッテラーは、ビュフォンに体现された博物学の発展を背景として、⁹⁷⁾ 「批判的合理化」の立場への移行を余儀なくされたといえるであろう。

2. ミハエリスと聖書の批判的研究の発展

上で述べたように博物学の発展、とりわけビュフォンに接して、ガッテラーが自らの歴史記述の内容変更を余儀なくされたことは重要な事実である。しかし「普遍史」の根本的基礎はあくまで聖書であった。もしも博物学の成果や主張が当時の神学的議論や聖書研究に真っ向から対立するような内容であったならば、果たしてこれをガッテラーは受け入れたであろうか。その可能性はずっと小さくなっていたとも考えられる。少なくともドイツの神学・聖書研究の状況、およびそれとガッテラーの関係を探り、これと比較考量してはじめて博物学がガッテラーの歴史記述に与えた影響を正しく評価できるということになるであろう。そこで本節では、18世紀ドイツにおける聖書研究の発展をあとづけ、そのなかで、ガッテラーの思想的変化の意味を考察することにした。

さて啓蒙主義の思潮は、フランスやイギリスにおけるほど顕著ではなかったにしろ、ドイツにおいてもやはり、18世紀を通じて次第に各界に浸透していった。ドイツの神学に関して言えばこの発展は啓蒙主義的理性による伝統的ドクマ解体の過程として現れるが、その展開には大きく3段階が区別できると言われる⁹⁸⁾。第1段階は、ハレ大学においてヴォルフ哲学とフランクの敬虔主義神学が共存していたことに現れていたような、理性と啓示とが平和な二元主義の状態を保っていた段階だが、同時にドグマの合理化も追求されていた時代である。しかしこの啓示と理性の関係は1740年代からその第2段階の時代にはいる。すなわち、「外国の批判の影響下で、合理的宗教をめざし、教義として定式化されていた啓示の内容を歴史的なものにすぎないとして除去することが行われたが、ただしまだ啓示を前提とし、啓示の概念のもとでその作業が展開された時代」⁹⁹⁾である。第3段階

は1780年代以後であって、啓示内容が最終的に合理的に解釈し直され、また啓示という前提そのものも一般的に放棄される時代である。32歳のガッテラーがゲッティンゲン大学に迎えられたのが1857年であった。そして上で述べたように、その「追隨的合理化」の立場から「批判的合理化」への移行を示す『世界史』が刊行されたのが1785年であった。この1785年という年号は微妙な年号で、年号だけで見れば上の第2段階への移行とも第3段階への移行とも言える。第2段階への移行であればその最も遅い例の一人ということになるし、第3段階への移行であればその最も早い例ということになる。ガッテラーの上の移行はこのいずれにあたるのであろうか。この問題を考察するためにまず18世紀40年代以後の、第2段階の神学研究の状況をみておきたい。

当時のドイツをめぐる思想的環境を示すものとして、18世紀前半のいくつかの思想史上の出来事を列挙してみよう。まず「科学革命の世紀」17世紀を代表するライプニッツとニュートンが16年、27年に相次いで生涯を閉じている。かわって「博物学の世紀」18世紀を代表するリンネの『自然の体系』第1版が出たのが35年、ビュフォンの『博物誌』の出版が開始されるのが49年であった。他方フランスでは34年にボルテールの『哲学書簡』が出版され、次いで48年にモンテスキューの『法の精神』が現れ、そして51年『百科全書』の出版開始へとつながっていく。ルソーの『人間不平等起源論』が現れるのは55年である。一方イギリスではロック、シャフツベリが7年と13年に死去し、かわって39年にはヒュームの『人性論』が発表されている。懐疑論では7年に死去したピエール・ベイルの名も落とすことはできない。また唯物論ではラメトリの『人間機械論』が47年に出版されていることも加えておこう。そして最後に、聖書の批判

的研究史の上で17世紀における「最も重要な人物」¹⁰⁰⁾とされるリシャール・シモンがその生涯を閉じたのは12年のことであり、さらに、ジャン・アストリュクが聖書研究の「近代的研究方法を創始した」¹⁰¹⁾のは53年のことであった。かれはモーセ五書の研究を行い、そこでヤハウェとエローヒームの二種類の神の名前が使用されているところから、これを複数の人々による記述を統合したものと主張したのである。このように18世紀前半のドイツの思想家たちは、聖書の批判的研究や自然科学の発展をはじめフランスの合理主義、イギリスの経験論と理神論、さらに唯物論、懐疑論の流れなど、多様な思想的諸潮流と対決しながら自らの立場を構築していくことを迫られていたのである。

他方宗教改革以来、ドイツの思想界は宗教の深い刻印を帯びており、その状況は18世紀においてもなお継続していた。それだけに上のようなヨーロッパにおける思想的環境の急速な展開は、とりわけドイツ宗教思想家たちに深刻な思想的対決を迫るものとなっていたといえよう。そしてこうした課題への取り組みの結果世紀半ばにドイツ神学全体にまず現れてくる新たな特質は、「啓蒙された敬虔な主観の彫琢」¹⁰²⁾と特徴づけることができるといわれる。これはバウムガルテン、イエルザレム、シュバルディングなど、1740年代以後大きな影響力を持った神学者に共通に見られる特徴であり、かれらはいずれも思想的出自を異にしながらも、しかしイギリス留学やイギリス思想との接触という共通の体験を経て、啓示と理性の一致を個人的な深い宗教体験の中で確信するにいたった人々であった。すなわちかれらは、一方で合理主義や懐疑主義の洗礼をうけた結果伝統的教義の批判を余儀なくされつつも、他方でシャフツベリの道徳哲学、美学などにによりながら、自己の宗教的感情を基礎とするあらたな神学の建設に向かっ

たのである。¹⁰³⁾

このようにかれらに代表される人々は合理主義をその宗教思想の一つの動因としていた。しかしそれは決して宗教(啓示)を否定しようとするものではなく、むしろそれを新たな思想的環境の中で擁護するためのものであったと言える。さらにここで重要なこととして、かかる合理的批判の活動を導き出したもう一つの原動力をかれらが共有していたことに注意しなければならない。その原動力とは「歴史的動因」¹⁰⁴⁾に他ならない。すなわちかれらはその「敬虔な主観の彫琢」の過程において、一方でその合理主義的動因から教義の批判を進めると同時に、その批判の正当性の諸根拠を歴史に、具体的には聖書と教義の歴史的研究に求めていったのである。そしてこうした動因をかれらに与えたものこそ、17世紀以来のヨーロッパにおける聖書の批判的研究の発展であった。まさに世紀半ば以後のドイツにおいて「啓蒙主義的神学は歴史的批判となった」¹⁰⁵⁾のである。そして上のシュバルディング、イエルザレムやザックなどカッシーラーが「ドイツにおける真の神学的「革新者」たち」¹⁰⁶⁾と呼んだ人々を中心として「新教義(Neologie)」派と呼ばれる新たな神学の潮流が形成され、さらにかれが「新教義派の真の教師たち」¹⁰⁷⁾と呼んだモースハイム、ミハエリス、エルネスティ、ゼムラーの活動が展開されて、かれらが「60年代から70年代にかけて、神学および釈義学の新教義派改革を指導する」¹⁰⁸⁾ことになる。

これら新教義派(Neologist)の人々においては、前世紀以来の聖書の批判的研究がその共通の出発点となっていた。かれらの基本的特質が、「新教義派の人々は、聖書を異なった時代に、当時の特定の状況に対応して書かれた書物を編集したものであると考えることにより、伝統と絶縁した」¹⁰⁹⁾という点に求められているか

らである。そしてかれらはこの立場から、聖書中の一つ一つの語句と文字がすべて靈感によるものとする、「逐語的靈感 (inspiratio verbalis)」の原則を否定した。聖書の語句はある特定の歴史的条件下で、その時代的条件に制約された表現で語られているとされ、従って聖書は、かかる制約をもつ表現の背後にある真の意味を取り出すために、批判的に研究されるべき「文献」とされた。しかし逐語的靈感の原則は、カトリックであれプロテスタントであれ当時正統派がまだ固執していた原則であり、¹¹⁰⁾これを否定することはまさに「伝統との絶縁」を意味したのである。そしてさらにその上で、かれらは聖書や教義、教会制度、異端などの歴史的研究を武器としつつ、原罪の思想の否定、キリストの花嫁としてキリスト教会を位置づける教会論の批判はじめ、伝統的教義に対する批判を展開していったのである。¹¹¹⁾

さて、ガッテラーの活動の場であったゲッティンゲン大学において、この新教義派が極めて大きな意味を持ったことも、また重要なこととして指摘しておかなければならない。というのは、ゲッティンゲン大学は1737年9月17日をもって正式に発足したが、この発足の時点から既に上のモースハイムが深く関与していることが明かになっているからである。¹¹²⁾ というのは大学の発足と発展に中心的役割を果たしたミュンヒハウゼンが、発足以前から神学部のあり方をめぐり当時ヘルムシュテットにいたモースハイムに助言を求めており、また定められた神学部の性格づけに、現実にもその助言が生かされているからである。すなわちゲッティンゲン大学では神学部内部での教授たちの宗派的論争を禁じただけでなく、もっと重要なこととして、他の学部の同僚の著作に対する検閲活動や異端宣告などを神学部に禁じ、他方他の学部の学者たちには神学的議論その他の専門以外の議論をも自

由に発表することを許したのである。こうした大学における寛容の実現と神学部その他学部への支配権の否定は当時のドイツでは初めてのものであり、そしてゲッティンゲン大学の今後の発展を根本で支えたものであった。モースハイムのかかる助言は決して個人的あるいは党派的観点からなされたものではなかった。かれは歴史によって根本的に規定され、従って時代によって変化するものとして教義をとらえており、かれの助言はこの根本的な教義・宗教観に基づいて、かかる性格を有する諸教義のうちの一つに過ぎない特定の教義が学部や大学全体を拘束することを拒否するものだったからである。他方また、かれはやがて自ら47年にはゲッティンゲン大学に移り、8年間だが神学部長と大学長を兼務したし、かれに先だってすでに哲学部ではミハエリスが45年以後その活動を開始していた。¹¹³⁾ こうしてゲッティンゲン大学は大学の原則の決定そのものにおいて、さらに実際の活動の面においても新教義派に大きな役割を与えていたのであり、その結果ハレ大学と並び新教義派の拠点の大学ともなっていたのである。

ミハエリスはイギリス留学後、28歳でゲッティンゲン大学に招聘された。上でも触れたように、またモースハイムもその一例であったが、当時ドイツ思想家の多くはイギリス思想から強く影響を受けていた。なかでもロックを出発点とし、またニュートン物理学とも結びついていち早くイギリスで展開されていた理神論が大きな影響を与え、新教義派の人々は、多かれ少なかれその影響下にあったと言われる。¹¹⁴⁾ とりわけミハエリスにおいてはイギリス留学が「決定的」¹¹⁵⁾な役割をはたした。従って、ハノーバーの君主かつイギリス・ハノーバー朝第2代国王のジョージ2世が創設したゲッティンゲン大学にとっては、かれはうってつけの人材であったとも言える。とはいえ、かれが神学部で行った

教義学の講義はこの大学においてすら余りにも突出した内容であったため、最初の10年近くは開講するや訴訟がおこり、政府による講義の禁止措置で終わることの繰り返しであったと言われる。¹¹⁶⁾しかしかれは卓越した教育者でもあり、各地から多数の学生をゲッティンゲンに引きつけただけでなく、ドイツ啓蒙主義歴史学の最高峰となるシュレーツァーや「近代緒論学の父」¹¹⁷⁾と呼ばれる宗教学者アイヒホルンはじめ数多くの弟子を育成し、ゲッティンゲン大学の地位を高めた功労者の一人ともなった。

ミハエリスの思想の一端を、かれが1770年から75年にかけて発表した代表作『モーセの律法』によって見てみよう。まず本書の冒頭で、かれはモーセの律法研究の意義を論じつつ次のように自らの立場を表明している。「モーセの律法に関する知識は、法一般についてモンテスキューが行ったような方法で哲学的考察を行おうと考える者にとって有用である。」¹¹⁸⁾すなわちかれはモーセの律法を何よりもイスラエルの民が置かれていた風土や歴史的条件の中で観察するのである。具体的にはこの「民族の幼年時代の古い法」¹¹⁹⁾として観察するのであり、なによりも砂漠地帯という風土の中で、アブラハム以来の「遊牧民的由来」¹²⁰⁾や、エジプトにおける国家生活の経験の後農耕民化し、そして国家を建設していった、その歴史の中においてモーセの律法を観察するのである。そしてかかる立場からする重要な結論は、「モーセの律法はイスラエルの民の環境の中では正しいが、しかしそれゆえに、それは他の環境のもとにある諸民族に導入されてはならない」¹²¹⁾ということであった。たとえばモーセの律法の示す国家像に関するミハエリスの考察を見てみよう。かれによれば、その出発点は「大きな家族」¹²²⁾に他ならなかった。こうした小国家ではその正直さゆえに選ばれた裁判官が父親のような権威をもって

統治していた。¹²³⁾またかかる初期の社会では、その規模が小さいため、習慣、宗教、共同体員の行動は同質性を有し、それゆえ裁判も迅速であったし不正もおかされることは殆どなかった。「この点では古い世界と新しい世界とで、また時代の相違によって大いに異なっている。オリエントではいまだに即決裁判が行われているのに、西洋では慎重な裁判の運営が行われている。古代の幼年期の人々は迅速な刑の執行を好んだが、近代においては、同じことだが成年期の人々は、これに対し慎重な執行を選んでいる。一般に国家が家父長式的であればあるほど大きな家族に類似していき、そこでは全てを統括する一人の正直な人、すなわち父を持つようになり、またそうした所では迅速な刑罰の執行が望まれるようになる。そして国家が一人の人間の統括能力をこえた大きさに拡大すればするほど、迅速な執行が無実の人を処罰する危険性が増大するものである。」¹²⁴⁾この議論はあきらかに日本のハッキリなどを例としながら裁判の形式や刑法の簡単さ、迅速さ、また厳しさなどを東洋の専制君主政体の特徴としたモンテスキューを下敷きにしている。¹²⁵⁾まさに冒頭で宣言した「モンテスキューの眼をもって法を観察」¹²⁶⁾するという立場が貫かれているといえよう。また他方、当時ドイツでは多くの人々が政治体制の改革にあたりその範例をなおモーセの諸規定に求めたり、また当時の厳格な刑罰がモーセによって正当化されるものと考えていたといわれる。¹²⁷⁾こうした中で、ミハエリスはそれを近代国家に無媒介に適用することに明確に反対したのである。もっともミハエリス自身にとっては、あくまでイスラエルの民は「神が創造された」¹²⁸⁾ものであったし、モーセの律法もまた神の与えた神聖な法であり、かれはこうした歴史的特殊性を析出したうえで、その背後にその法を活かしめている普遍的な精神を見いだそうと

努めたのであった。¹²⁹⁾ しかしかれの本意はともかく、「ミハエリスの同時代の歴史分析手段による旧約聖書釈義は、ドイツにおける聖書釈義において革命的な影響を与えることとなった。」¹³⁰⁾ そしてかれを代表者の一人とする新教義派の影響力は急速に広まることになるが、その余りに急激な展開は、中心人物の一人だったハレ大学のゼムラーが改革の行き過ぎを懸念して、万人の驚くなか、1788に発布されカントが一時筆を折ることを強制された悪名高いヴェルナー勅令を支持したほどであった。¹³¹⁾

筆者はこの「革命的な影響」を示す一例としてガッテラーをとらえているのではあるが、そこに進む前にあと一点、述べておかなければならない。それはミハエリスがモーセの律法を「民族の幼年時代」のそれと位置づけていることにかかわる問題である。というのは、上にも示したようにかれは単純さと正直さを特徴とする「民族の幼年時代」を設定するが、この立場は新たな神話学の成立を促すことになるからである。実際、かれはモーセの律法のみでなくモーセ五書の記述全体をこうした民族の幼年時代特有の神話の一つと考えていくのである。「幼年時代にあたる人々は、たとえばかれらが異なった土地に住んでいようと同一であるように思われる。いずこにおいても子供は同じであるように、かれらはその年代に帰すべきであり、また成年や老年の人々とは異なった、ある共通の習慣や行動様式を持っている」¹³²⁾ と述べ、そこからモーセの律法研究のため、まだ同じ幼年期の段階にある人々の研究を進めようと提言する。すなわち、「もしわれわれがアラビア人の習俗について知らなかったなら、われわれはモーセの律法をその古い由来から解明することはほとんどできなかったであろう」¹³³⁾ と言い、さらにアラビア人の古来の習俗について今後もっと詳しい調査がなされるべきだと主張するのであ

る。この主張は単なる言葉だけのものではなく、かれ自身がかかわった実際の活動を背景にしたものであった。というのは、この調査はかれの弟子たちを中心に、既に1761年以後デンマーク王の後援で遂行されていたからである。しかしこの調査活動は高名な歴史家の父となるニーブールのみが、1767年、ただ一人の生き残りとして帰国するという悲惨な結末に終わってしまったのである。¹³⁴⁾ またこの探検調査は別の側面でも重要な意味を持っていると思われる。モーセ五書を幼年期にある民族の神話ととらえ、そうした立場から企画された探検調査がデンマークの王室を動かし、さらに実施されたということは、ミハエリスの考えが決して孤立したものではなかったこと、むしろこれを受け入れる精神的風土がヨーロッパに広く存在していたことが示されていると考えられるからである。

さて、32歳のガッテラーがゲッティンゲン大学に招聘されてきたのは1759年である。続いて1763年には古典学者、考古学者であるハイネが赴任してきて、以後二人は終生深い交流を続けていく。ハイネはまた、1770年代に入って次第に疎遠とはなるが、ミハエリスと親友の関係を結んでいる。このようにガッテラーとミハエリスは、ハイネを介して親しい間柄にあった。そしてこうした個人的関係を反映するかのように、はやくからガッテラーの著書にミハエリスの名が現れている。たとえば『普遍史教科書』(1760)において、バベルの塔を建設したのは遊牧民であり、これはかれらがその本拠地に帰るための眼印として建設したのであって、高慢のゆえではなかったのではないかと議論する場所があるが、ここでミハエリスが援用されている。¹³⁵⁾ また『普遍史序説』(1771)で、上でも紹介したようにヘブライ人のエジプト滞在を215年とするのは、実はミハエリスの説を受け容れているのである。¹³⁶⁾ だがそれが決定的な形

で現れてくるのは、やはり『世界史』(1785)である。かれはまず序文で典拠となる聖書をルター訳のものではなく、ミハエリス訳のものとすると宣言している。そしてその上で、モーセ五書の記述を上で述べたように「伝説的歴史」と位置づけているのである。そしてアダムとエヴァについては「大人の身体と子供の魂を持った人」¹³⁷⁾と述べ、さらに聖書の神話にあらわれる神についてこれを「初期の人間たちの幼児的神概念」¹³⁸⁾と規定し、ここから、先にも紹介したように、天地創造が6日間で行われたことを否定したり、様々な事象を直ちに神による奇跡と断ずる聖書の記述を批判していくのである。ただしかれもまた、奇跡一般を否定しているのではない。「人は啓蒙されればされるほど、奇跡の濫用に反対するものである。だがこのことは啓蒙された人々が全ての奇跡を否定するということを意味するのではない。むしろ啓蒙された人々は真の奇跡に対する雄弁な擁護者なのであって、かれらは、神が特定の意図の達成のために事物のありふれた成り行きのなかに奇跡を織り込んでいることを最も明瞭に確信しているのである」と述べているからである。¹³⁹⁾

ガッテラーのこの立場は、まさに本節のはじめで紹介した、「教義として定式化されていた啓示の内容を歴史的なものにすぎないとして除去することが行われたが、ただしまだ啓示を前提とし、啓示の概念のもとでその作業が展開された」という規定に合致する。他方その時代について言われていた40年代から80年代までという点について言えば、ガッテラーはむしろその流れの中で最も遅く転換した一人と言えよう。かれは、『普遍史序説』を刊行した1771年にはまだ「逐語的靈感」の原則をまもり、筆者の言う「追隨的合理化」の努力を行っていたし、この原則の放棄を宣言して「批判的合理化」の立場への移行を明らかにしたのが『世界史』の

1785年だからである。この「遅れ」はガッテラーの信仰がもたらした躊躇と解する以外にないように筆者には思われる。一方その移行に対しては、これにミハエリスが大きく関与したことは確かであろう。両者の個人的関係からのみでなく、また上で述べた諸点での両者の基本的見解の並行関係は決して偶然とは考えられないし、だとすればその基本的見解の形成において時間的に先行しているミハエリスのほうの影響を与えたと考えるのが自然だからである。

四. 小 括

カッシーラーによれば、「啓蒙主義哲学にとって歴史の問題は最初宗教の分野において提起されこの分野において真に切実な意味をもった」のであり、さらにその「成果はすべて啓蒙主義に新しく歴史的世界の全体的地平を開くものとなった」¹⁴⁰⁾とされる。本稿のここまでの議論はカッシーラーの主張を裏書するものともなった。すなわち18世紀前半においては歴史学はまだ神学に従属していた。歴史学者ガッテラーにおいては、その状況は1771年の『普遍史序説』までなお続いていたと言える。そこでは歴史は聖書の真理が展開される場と考えられ、非合理と見える様々な事象も「追隨的合理化」によって説明が試みられていた。しかしこの間ドイツの神学においてはフランスや、とりわけイギリスの影響下ですでに聖書の批判的研究が進展し、新教義派によつてその作業が急速に展開していた。そして世紀後半にはいると歴史はそこにおいて神学的主張が争われる舞台となり、歴史が神学的論争に根拠を与える地位を獲得した。歴史はまさに宗教の分野で「真に切実な意味」を有するようになり、そしてこの転換の過程で「歴史的世界の全体的地平」が開かれていきつつあったのである。ミハエリスを代表者の一人

とする新教義派の切り開いたこの地平は、それが「普遍史」の基礎であった聖書と歴史との関係を大きく変えた点で、何よりも「普遍史」叙述者としてのガッテラーにとって最も根本的な影響を与えるものとなったと考えられる。従ってガッテラーの『世界史』(1785)における「批判的合理化」の立場への転換は、まさにこのドイツにおける神学と聖書研究の発展を根本の原因としていると考えられる。

ところでこの間、18世紀を代表する学問の一つ博物学もまた一つの転換期を迎えていた。18世紀末の時代は科学的思考方法が根本的に変化した時代で、「『記述』の終焉」、または「博物誌の終焉」^[141]の時代とも、^[142]「博物誌 (natural history) から自然史 (history of nature) へ」^[143]の転換期とも表現されている。そして『博物誌』におけるビュフォンは、この立場では、「人々が、静的な自然描写から真の自然史へという一歩をまだ踏み出すことができず、またあえて踏み出そうとしなかった」「この時代の逡巡を写し出している」^[144]と評されている。他方、かれの『自然の諸時期』(1779)を重視する立場から、「ビュフォンは最後の作品においても、一八世紀から一九世紀への移行を特徴づけた深遠な知性の変化の、証人であると同時に張本人であった」^[145]とも評価されている。いずれの評価が正しいにしろ、まず、「追隨的合理化」段階のガッテラーが接したのが「逡巡」を示すビュフォンであったといえる。そして「批判的合理化」におけるガッテラーが接したのは、まさに上の変化の「張本人」としてのビュフォンであった。ガッテラーはビュフォンの主張を受け容

れて自らの記述を大きく変えざるを得なくなっているからである。ただしそれを受け容れることは「追隨的合理化」の態度の放棄を迫られることになる。したがってここでも新教義派の場合と同様に、かれには「批判的合理化」への移行が迫られていたのである。こうしてガッテラーは、聖書に対する自らの態度変化を基礎としながら、『自然の諸時期』の新たなビュフォンの主張を受け容れ、さらにその諸要素を自らの「批判的合理化」の武器の一つとして利用してもいったと考えられる。

さらに上のガッテラーの転換はフーコーの、いわゆる「古典主義時代」^[146]が終焉に向かう時代の動き全体とも重なっており、したがって、ガッテラーをかかえる動きの中の一例とも位置づけることができると考える。なぜなら、上で述べたようにガッテラーの「批判的合理化」は、その作業を推進すればするほどますます旧来の「普遍史」の自己否定を推進することになり、従ってまた歴史学の神学からの自立を推進することになり、かくして近代的・科学的「世界史」にますます近づくものとなるからである。もともとその最後の一線をガッテラーが越えなかったことも事実であり、この事実の重みは変わらない。かれは一方で18世紀の内部における転換に係わりはしたが、そして19世紀の準備はしたが、かれの世界史叙述は、なお聖書に「へその緒でつながっている」ものであった。こうしてあくまでかれは18世紀の知的世界の住人に留まったといえる。かれが世を去ったのは1799年であつが、この年号がはからずもかれの歴史的位置を象徴するものとなったと言えよう。

〔註〕

- 1) 「ドイツ啓蒙主義歴史学研究 (I-1)」『埼玉大学紀要 教養学部』第26巻、1990年 (以下、拙稿(1))。
- 2) 「ドイツ啓蒙主義歴史学研究 (I-2)」『埼玉

玉大学紀要 教養学部』第27巻、1991年 (以下、拙稿(2))。

- 3) 前稿でもあげたが、書名は以下のとおりである。

○Handbuch der Universalhistorie nach ihrem gesamten Umfange von Erschaffung der Welt bis zum Ursprung der meisten heutigen Reiche und Staaten, Göttingen 1761. (以下, *Handbuch*)

○Einleitung in die synchronistische Universalhistorie zur Erläuterung seiner synchronistischen Tabellen, Göttingen 1771. (以下, *Einleitung*)

○Weltgeschichte, Theil 1,2, Göttingen 1785. (以下, *Weltgeschichte*)

○Versuch einer allgemeinen Weltgeschichte, Göttingen 1792. (以下, *Versuch*)

- 4) Handbuch, S.141.163.いわゆる「モーセ五書」をさしている。
- 5) Versuch, S.3.
- 6) 「神はその全能によって全世界を一瞬にして創造されることもできたであろうが、その無限の知恵にかなったのは6日間で世界を創造されることだったのである。」(Handbuch, S.146)
- 7) アダムとエヴァの創造などを叙述したあとに「これらのことは、すべて創造第6日に起こったのである」とのべている (Einleitung, 2. Theil, S.41)。
- 8) Weltgeschichte, S.3.
- 9) Ebenda, S.1.
- 10) Ebenda, S.25f.
- 11) これについては第三章第1節で考察する。
- 12) Reill, P.H., The German Enlightenment and the Rise of Historicism, 1975, p.79.レイルはガッテラーの前期と後期で「合理化」のあり方が変化したことを指摘している。「初期の著作をつうじて同じような非合理的合理化がみられる」とし、他方後期においては「大洪水以前の叙述を縮小していくこと」、「自然主義的合理化を放棄する」こと、著作の「キリスト教中心の特質」を薄めていくことの3点を指摘しているからである。しかしかれは本稿におけるように後期における変化もなお別の形で「合理化」としてとらえ得ること、およびその事の意味については充分考察していない。この点に関して深めることが本稿の目的であるとも言える。
- 13) たとえばアウグスティヌスは、『神の国』の第15巻で第9章(洪水以前の人間の長寿および身体の大きさについて)から第14章(年の

長さはあの当時も今も同じである)までをこの議論にさき、聖書に100年とあるところは10年と考えるべきであるとする説などを反駁しつつ、その1年をわれわれの1年と同じ長さと考えべきことを主張している。

- 14) Handbuch, S.155.
- 15) Ebenda, S.154f.
- 16) Ebenda, S.163f.
- 17) Ebenda, S.156.
- 18) Ebenda, S.155.
- 19) 41年間で人口が倍になるとした場合の、大洪水の直前の創世紀元1640年の人口である (Handbuch, S.157)。これに対し、ガッテラーはかれの時代の世界人口をヨーロッパ1.6億、アジア5億、アフリカ1.5億、アメリカ1.5億、合計約9.6億と推定しているのである (Einleitung, 1. Theil, S.96.)。なお、この推定にあたってズュースミルヒに依っているが、ズュースミルヒはドイツ統計学、人口論の出発点を築いた人である (松川七郎「ヨハン・ペーター・ズュースミルヒ」、『商学論纂』14-4, 1973。岡田實「ズュースミルヒの人口思想」、『経済学論纂』31-1・2, 1990)
- 20) Einleitung, 1. Theil, S.61.
第1段階：900～969歳；創世紀元1656年の大洪水まで、アダム(930)・メトセラ(969)・・・ノア(950)
第2段階：2／3；600歳；大洪水直後、セム(600)
第3段階：1／2；450歳；アルパクサデ(439)・・・エベル(464)
第4段階：1／4；239歳；ペレグ(239)・・・テラ(205)
第5段階：1／8；120歳；モーセ(120)
第6段階：1／12；70～80歳；ダビデ(創世紀元2969年死)以後今日まで。
- 21) Einleitung, 2. Theil, S.106ff.
- 22) Einleitung, 1. Theil, S.91.以下に挙げるその原因に関する議論も同様。
- 23) 休日の多さを攻撃することは、当時のプロテスタントのカトリック批判に共通するテーマとなっていた。Möller, H., Vernunft und Kritik, 1986, S.87.
- 24) 注19)も参照。
- 25) Einleitung, 1. Theil, S.61.
- 26) 『普遍史序説』の他の場所でも、「ノアの子孫たちは、息子、孫、曾孫等々その人であるか、

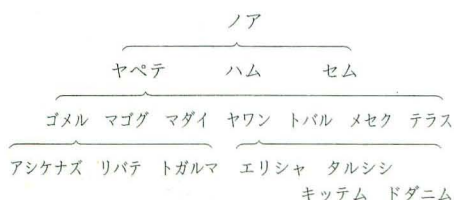
またはかれを祖とする種族であるか、または両者を兼ねているかのいずれかである」(Einleitung, 2.Theil, S.51) と言っている。

ちなみにガッテラーの後期におけるこの問題の扱いを見ておくと、『世界史』ではヤベテ、ゴメルなどの名称が種族の祖の名称であると同時に種族、民族名でもあったとし、「アダム、セツ、エノス等々の名称についても種族、民族の名称でもあることをどうして否定し得ようか？」(Weltgeschichte, S.9) と主張する。このように考えれば、大洪水以前の人々の長寿については、もはや頭を悩ます必要はなくなることになるだろう。

- 27) Handbuch, S.147. 「1655年に提出されたペレールの学説は、直ちにその後様々な学者たちによって否定された」としつつ、自らもダンネンバウアーらとともに否定する側に立つことを表明している。

また『普遍史序説』では、「全人類は唯一人の祖であるアダムに由来する、一つの家族である」と述べ、皮膚の色の違いについては「それはただの変種にすぎない」とし、アダムの時代には「黒くも白くもなく中間の色であった」が、人類が拡散した後に太陽光線の強さの違いなど自然環境の違いによって変化が生じたとしている。(Einleitung, Theil 1 S.62)

- 28) Einleitung, 2.Theil, S.46. なお、パロパミスはヒンズークシュ山脈西端につらなり、イラン高原北縁を東西に走る山脈である。
- 29) Ebenda, S.47.
- 30) Ebenda, S.48.
- 31) Ebenda, S.49f.
- 32) 聖書に示されている系図は次のとおりである。



- 33) Ebenda, S.70ff.
- 34) ドイツ人については、ガッテラーは『普遍史教科書』ではアシケナズを祖としていた (S.179)。この『普遍史序説』では明言はされていないが、上の議論からいけばゴメルを祖と

するが、アシケナズの子孫たちとの混血によって成立してくる民族ということになるだろう。

- 35) 残りのヤベテの子孫については下記のとおりで

である；

○ヤワン；イオニア人、アジアの初期のギリシア人。

エリシャ；アイオリス人、ヘレネス。

タルシシ；ギリキア人。

キッテム；ペロポネソスのペラスゴイ、ダキア人、ゴート人もここから出てきた。

ドダニム；テッサリアのペラスゴイ、エピルスのドーローナ人。

○トバル、メセク；不明

○テラス；トラキアに住んでいたスキュティア人、サルマティア人、メディア人の総称であろう。

かかるヤベテの子孫たちの位置づけの、その後の発展または変化については、注69) を参照されたい。

- 36) Huddleston, L. E., *Origins of American Indians, European Concepts, 1492 - 1729* (1972).

ここにはヨーロッパ人がインディアン

の起源について述べた様々な主張、カルタゴ人説、古イスパニア人説、東インド説、アトランティス説をはじめ、イスラエル王国がアッシリアに滅ぼされた際、アッシリアによって連れ去られたまま行方が知れなくなったイスラエル10部族とする説などが紹介されている。

- 37) Einleitung, 2.Theil, S.181.

38) Handbuch, S.441.

39) Einleitung, 2.Theil, S.74.

40) Ebenda, S.86.

- 41) 今日の比定と合致しているのはゴメルをキンメリア人の祖名とした部分、トガルマをアルメニア人とし、マダイをメディア人とする部分、ヤワンをイオニア人とした点くらいである(『聖書大辞典』参照)。

- 42) Einleitung, 2.Theil, S.46 ガッテラーは『普遍史教科書』では「アララット山の場所は…詳しくは十分な根拠を持って決定することはできない」(S.165) としていたが、この『普遍史序説』で自己の見解を定めた後は、最後までその立場を変えなかった。

- 43) アルメニアのアララット山とする伝統的見解の形成については、"On the Legend of

- Noah's Ark"と題された Simon Pottar 氏の一連の論考("Journal of Tsuda College", Vol.22~25.1990~1993)が大変詳しい。また同,"Comments on the Sites Where Noah's Ark Has Been Alleged to Rest."(『埼玉大学紀要 教養学部』第28巻, 1992)も参照。
- 44) Edwin J. van Kley, Europa's "Discovery" of China and the Writing of World History.("American Historical Review" vol. 76-2,1971) 参照。
- 45) Handbuch, S.645.
- 46) Handbuch, S.166.
- 47) Einleitung, 2. Theil, S.74
- 48) Weltgeschichte, S.11.
- 49) 「かれは……フランス人医師ジャン・アストリュクの原典に関する仮説を承認した。」(Schaumkell, L.E., Geschichte der deutschen Kulturgeschichtschreibung) 1905, S.59.)
- 50) この点は第三章第2節で詳しく検討する。
- 51) Weltgeschichte, S.14.
- 52) Weltgeschichte, S.15.
なお、カントは『天界の一般自然史と理論』(1755)の土星に関する議論のなかで、「思いつき」と断りながらではあるが、ノアの大洪水は、昔は土星と同じように地球にも存在した「輪」が一挙に地上に落下したことによってもたらされたものと述べている。
- 53) Ebenda, S.16
- 54) ガッテラーは、以上の諸根拠のほかに、シベリアから当時続々と発見されつつあった象の骨も、大洪水がインダス、ガンジス流域で起こったことの証拠と考えていた。シベリアの象の骨は、「象の群れがインド洋から侵入してくる上げ潮に迫られて北へ北へと逃げ、ついに群れ全体がシベリアとの境界の山脈の開口部を越えて入り込みそこで次第に死に絶えていった」(Weltgeschichte, S.18) 遺物であると考えたのである。
- 55) Ebenda, S.17.
大洪水が局地的なものであったとする考え方は、既に Sir Thomas Brawne が1640年に主張した。かれは「新大陸」の存在を考慮にいれてこれを主張したのだが、さらに、「洪水は局地的であったが、しかし人間が居住していた世界は、この局地的洪水が全て破壊し
- たとする考えは、17世紀後半には広く受けいれられていた」といわれる (Huddleston, op. cit. p.138)。ガッテラーはこの議論をさらに一歩進めて、場所のみでなく、さらに後述するように滅んだ人々についても狭く限定しようとするのである。
- 56) Einleitung, 2. Theil, S.44.
また別の場所では次のようにもいっている：「大洪水, 1656年。私は大洪水が全知を覆った (allgemein) と信じている。……この恐るべき事件が普遍史において最も重要な事件だということはだれでも理解できることである。人類はほとんど完全に絶滅させられ、そしてすべてが、天地創造後と同じように、大洪水後新たに再出発したのである。」(S.25)
- 57) Weltgeschichte, S.16.
- 58) Einleitung, 2. Theil, S.45.
- 59) Weltgeschichte, S.19.
- 60) 「聖書の系譜における族長に関しては、どの族長も書きとどめられている息子の他にもっと多くの息子たちや娘たちを持っていたということに注意しなければならない。」(Ebenda, S.9)
- 61) Ebenda, S.16.
- 62) Ebenda, S.19.
- 63) Ebenda, S.29.
- 64) Ebenda, S.17. なお、ここでは、第1節で紹介した創世紀元1640年の人口推定値も捨てられていることに注意。
- 65) Ebenda, S.19.
- 66) Ebenda, S.29.
- 67) 「インダスとガンジスの流域で起こった洪水は、大規模ではあったが、全世界を覆いはしなかった。しかしこれが契機となって古い世界の様々な技能・技術が発揮されて舟の建造が行われただけでなく、さらにノアを祖とする全種族のインドからエデン、中近東、エジプト等々への強力な拡大を引き起こし、これらの地でノアの子孫たちが定住民、遊牧民などの原住民と出会うことになった。ノアは舟の最初の建造者であるが、また最初のブドウ栽培者でもあった。」(Versuch, S.5)
- 68) 最後の著作『世界史試論』(1792)でもアダムとエヴァを「最初の人間たち」とよんでいる (Versuch, S.3)。
- 69) たとえば『世界史』におけるヤベテの子孫と歴史上の民族との比定の結果を紹介してみよ

う (S.138f.)

1, ゴメル; キンメリア人

アシケナズ; ビチュニア人, 小フリュギア人。

リバテ; ウラル山脈またはドン川上流地域の住民。

トガルマ; アルメニア人。

2, マゴグ; マッサゲタイ人, 後のトルコ人の祖先。

3, マダイ; メディア人。

4, ヤワン (イオン); イオニア人, またはギリシア人。

エリシャ; エリス人, またはヘレネス。

タルシシ; スペインのタルテッスス, またはシチリアのタルススの住民。

キッテム; マケドニア人, または中部イタリアのペラスゴイ, または両者をともにさす。

ドダニム; エピルスのドーナーナ人, または南ガリアのローヌ流域の住民

5, トバル; イベリア, カップパドキア, シチリアのティバル人。

6, メセク; モシ人 (ユーフラテス上流地域住民)。

7, テラス; トラキア人 (ドニエプル流域の住民)。

70) 前註のヤベテの子孫の分析には、『普遍史序説』での分析を引き継いでいるものもあるが、それとは大きな違いがある。すなわち、現代の諸民族との対応関係についての議論が見られず、諸民族がすべて古代のオリエントを中心とした地域の中に位置付けられていることである。また「セムの子孫は全てヘブライ人」(142)とする結果、かつてはジャバ人としていたヨクタンの子ヨバブについても、アラビアの、今日のハマダン近郊の住民でプトレマイオスがヨバル人と呼んだ人々だろうかと推定している (143)。中国人や日本人についての議論もここにはみられない。

71) ペレールは、『創世記』第1章にある創造第6日における人間の創造と、第2章で述べられるアダムの創造とを別個の創造と考え、アダムをユダヤ人のみの祖先としプレ・アダム人をその他の人々の祖先とした。そしてノアの大洪水の物語をはじめとする『創世記』の

記録はすべてアダムの子孫に関するものであり、従ってプレ・アダム人の子孫は大洪水に係わりなく生き続けたとしたのである。ガッテラーはペレールの人類多元発生論を否定して一元論の立場は守ったが、ノアの洪水が局地的なものとする見解や、洪水以後の諸民族の記述はノア族についてしか記述がなされておらず、別に洪水を免れた多くの民族が存在したとする見解はなどは共有しているのである (前川貞二郎、『歴史を考える』ミネルヴァ書房, 1988, 22頁以下。また Huddleston, op. cit. p.138ff.)。

72) 拙稿(1)を参照されたい。

73) 「この新著をかれはあらたに世界史と呼び、もはや普遍史とは呼ばなかった。」(Schaumkell, L.E., a.a.O.S. 58) ただし、シャウムケルは、ガッテラーの『世界史』についてこの重要な事実を指摘はするが、この事実が意味するところについては述べていない。

74) 拙稿(2)を参照されたい。

75) 松永俊男、『博物学の欲望』講談社現代新書 1992年, 9頁。

76) Einleitung 2.Theil, S.45.

77) Ebenda, S.45f.

78) こうした議論は現代のわれわれには奇妙にうつる。それはわれわれが「現在までに世界から報告された生物の種はおよそ150万種といわれている。」(西村三郎『リンネとその使徒たち』人文書院1989年, 14頁), あるいは見積りということになると顕花植物のみで25万種は下るまいとされ、動物に至っては300万種とも500万種ともいわれて「一体どれだけあるのかいまなお見当がつかない」(同292頁)といったことを聞いているからである。

だが、当時はリンネも植物の種について大きく異なった数値を推定していた。「私はかなり確実な計算によって、地球上に生じる植物の数は一般の人々が信じているよりもはるかに少ないことを見いだした。即ち、それは一万をこえることはないのである(『植物の種』1753年序文)。(同, 292頁による)

79) ジャック・ロジェ, ベカミエール直美訳『大博物学者ビュフォン』工作舎 1992年, 392頁を参照。

80) ロジェ, 上掲書 397頁。

81) 同, 396-397頁

82) 荒俣宏『大博物学時代』工作舎 1982, 10頁。

83) ビュフォンの四足獣類の分類 (ロジェ, 398 頁より)

〈それだけで一つの属を構成する孤立した種〉

旧世界に固有のもの; ゴウ, サイ, カバ, キリン, ラクダ, ライオン, トラ

両大陸に共通のもの; クマ, モグラ

新世界に固有のもの; パク, カビバラ, ペッカー

〈いくつかの種を集合する属〉

旧世界に固有のもの, あるいは両大陸共通のもの

- 1, いわゆる単蹄類; ウマ, シマウマ, ロバ, ラバ (旧世界に固有)
- 2, 中空の角をもった大型二蹄類; ウシ, スイギュウ, バイソン (両大陸に共通)
- 3, 中空の角をもった小型二蹄類; ヒツジ, ヤギ, ガゼル, マメジカ (旧世界に固有)
- 4, 堅い角をもつ二蹄類; ヘラジカ, トナカイ, アカシカ, ダマシカ, アクシスジカ, ノロジカ (両大陸)
- 5, あいまいな二蹄類; イノシシ, ブタとその変種 (旧世界に固有, ただしペッカーはここに位置?)
- 6, 引っ込められる鉤爪をもった肉食裂脚類; ヒョウ, チータ, ユキヒョウ, ネコとその変種 (旧世界)
- 7, 引っ込められない爪をもった肉食裂脚類; オオカミ, キツネ, ジャッカル, イヌとその変種 (両大陸)
- 8, 尾の下に袋をもつ引っ込められない爪をもった肉食裂脚類; ハイエナ, アナグマなど (旧世界に固有)
- 9, それぞれの脚に五本の指をもつ体長の長い肉食裂脚類; ムナジロテン, マングースなど (両大陸)
- 10, 両顎にそれぞれ二本の門歯がある体に刺のない裂脚類; リス, ネズミの全種類など (両大陸に共通)
- 11, 体が刺でおおわれた裂脚類; ヤマアラシ, ハリネズミ (旧世界に固有)
- 12, 鱗におおわれた裂脚類; センザンコウ (旧世界に固有)
- 13, 水陸両生の裂脚類; カワウソ, ビーバー, デスマン, セイウチ, アザラシ (両大陸に共通)
- 14, 四手類; サル, ヒヒ, オナガザル, キツネザル, ロリスなど (旧世界に固有)
- 15, 翼をもつ裂脚類; オオコウモリ, コウモリ (両大陸に共通)

新世界に固有のもの

- 1, リスザル類; 八種
- 2, キツネザル類; 六種
- 3, ヨツメオポッサムまたはオポッサム類

- 4, ジャガー類; ピューマ, オセロットなど
- 5, ハナグマ類; 三ないし四種
- 6, スカンク類; 4 ないし五種
- 7, アグーチの属; アクシ, テンジクネズミなど
- 8, アルマジロ類; 七ないし八種
- 9, アリクイ類; 二ないし三種
- 10, ナマケモノ類; 二種

84) この推測は一方でノアの大洪水が「全地を覆ったと確信している」と述べていたかれの記述と矛盾する。ただし, ガッテラーは他方でアメリカ・インディアンはノアの洪水後にアジアから渡ってきたとも述べていた。ここから上の矛盾は, ガッテラーは明言してはいないのだが, 上の言葉にある「全地」とは人類が存在していた「旧大陸」のみをさすと理解すれば解消することになる。

85) ガッテラーはリンネについては特に指摘できるような記述を残してない。しかし, リンネが「アダムが墮落する以前の「エデンの園」にすべての植物があって, アダムはそれを観察し, 命名していたと解釈していた」こと, そして全ての植物を集めた植物園を造れることが可能だし, これを造れば人類の墮落以前の楽園が再現できると考えていたことは, ここで思起しておく価値があろう。
(松永, 上掲書82頁)

86) Weltgeschichte, S.2.

87) Ebenda, S.3f.

88) かれは既に1749年に『博物誌』第1巻の第2説で「地球の記述と地球の理論」という論文を発表しているが, ここではかれは「原海洋」あるいは「汎大洋」説とも言うべき立場に立ち, かつては地球は現在の海面より「二千尋 (約三, 六六〇メートル) 高い海面をもつ海に包まれており, 波力によって現在の地層が形成された」と考えていた (荒俣宏, 上掲書, 58頁)。

また地球の変化は周期的であって一方向の変化ではないと考えていた (ロジェ, 上掲書138頁)。

89) 同上, 477頁~501頁より。

90) アンデス山脈, アフリカ東部の山脈, ピレネーからアルプス, コーカサス, チベット, 中国に続く山脈などがこれに当る。

91) シャルル・ボネの説で「胚種先行説」ともいわれるが, これを否定したのがビュフォンであった。

- 92) ロジェ, 上掲書, 484頁以下。また荒俣宏, 上掲書, 56頁以下に実験の詳細が紹介されている。
- 93) ロジェ, 上掲書, 487-488頁。
- 94) ピエール・ガスカール, 石木隆治訳, 『博物学者ビュフォン』白水社 1991, 216頁。
- 95) 拙稿(1), (2)を参照されたい。
- 96) 原文はそれぞれ, “wer wies, seit wie vielen tausend Jahren”, “in dem Laufe von Jahrtausenden”である。
- 97) なおリンネも地球の年齢について, 化石やスウェーデンの海岸地帯の観察などから, 6千年という年数よりは遙かに長い時間が経過していると考えているにいたっている(松永, 上掲書, 87頁以下)。
- 98) ドイツの神学研究の状況についてはレイルの上掲書のほか, 次の諸研究を参照した:
○Cassirer, Ernst, Die Philosophie der Aufklärung, 1932. (中野好之訳, 『啓蒙主義の哲学』紀伊国屋書店 1970年)
○Walter Sparr, Vernünftiges Christentum. Über die geschichtliche Aufgabe der theologischen Aufklärung im 18. Jahrhundert in Deutschland. (in “Wissenschaften im Zeitalter der Aufklärung” 1985.)
- 99) Sparr, a.a.O.S. 21f. なお, メラーも後ほど問題とする新教義派について: 「この, とりわけ1740年から1790年までの間大きな影響を与えた神学の学派」とのべて同様の時代区分を与えている(Möller, a.a.O.S. 79)。
- 100) 前川貞次郎『歴史を考える』1988年, 21頁。またポール・アザール, 野沢協訳『ヨーロッパ精神の危機』1680年, 第3章参照。
- 101) 『西洋人名辞典』岩波書店
また米倉充『旧約聖書の世界』人文書院1989年31頁を参照されたい。
- 102) Sparr, a.a.O.S. 38.
- 103) Baumgarten (Alexander Gottlieb, 1714-1762) は, ハレ大学に学び敬虔主義を出発点としながら, これにヴォルフの合理主義を結合して独自の宗教哲学, 美学を形成した。他方, Jerusalem (Friedrich Wilhelm, 1709-1789) はライプチヒ大学に学びヴォルフ哲学を出発点としながらやがて「私の経験が私の証明である」として啓示の真理への確信を表明した。最後に Spalding (Johann Joachim, 1714-1804) は正統派ルター主義から出発しヴォルフ哲学にも接近しながら, やがて人間の「単純性」の認識を基礎に新たな歩みを開始し, イエルザレムらとともに, 新教義派 (Neologist) とよばれる新潮流の原流を形成していった (Ebenda, S. 35ff.)。
- 104) Ebenda, S. 36.
- 105) Ebenda, S. 42.
- 106) カッシーラー, 上掲書, 216頁。かれはここで後述のゼムラーの名もあげている。
- 107) 同上, 244頁。
- 108) Reill, op.cit. P. 171.
- 109) ibid. p. 82.
- 110) カッシーラー, 上掲書 57頁。例えば, ゲッティンゲン大学の, 新教義派登場以前の空気をよく示す逸話がある。神学部が発足最初の10年間で処理した様々な問題の中に, 聖書にある「6日間での創造」は文字通りの6日か否かという問題があったが, これに対し神学部はルターが天地創造の物語の寓意的解釈に反対していたとの理由で, 文字通りの6日と決定しているのである (Götz von Selle, Die Georg=August=Universität zu Göttingen 1737-1937, 1937. S. 81)
- 111) 「原罪の思想こそ, その克服のために啓蒙主義哲学の様々な立場が一丸となって結束した共通の敵であった」(カッシーラー, 同, 172頁)。
たとえばゼムラーは宗教と神学 (精神と形式) とを区別し, 人間精神が生み出す形式は必然的にそれらが形成される地方的・時代的狀況を反映するものと考え, それを明らかにすべく, 聖書を「文献」としてその歴史的研究に取り組んだ。そしてこうした立場から, イエスのメッセージに着着している場所と時代の特異性と其の表現の持つ眞の意味とを区別・解明しようと努力していったのである (Reill, op.cit. pp. 165-168)。
- 112) 以下は, Götz, a.a.O.S. 38-41を参照。
- 113) 当時ミハエリスとモースハイム, 博物学者アルブレヒト・フォン・ハラウ, 古典学者ヨハン・ゲスナーの4名は毎週ハラウの家に集まって互いの研究について討論を行っていた (Reill, op.cit. p. 194.)。
- 114) 「新教義派の人々の相違が特に現れるのは, どの程度まで理神論の影響を受けているか

- という点においてである。」(Möller,a.a.O. S.80)
- 115) Michaelis (Johann David,1717-1791) はハレ大学のオリエント学者を父とし、ハレで学んだ後オックスフォードで学んだが、「1年半以上に及んだこのイギリス留学が、かれの生涯において決定的な意味を持つこととなった」(Götz,a.a.O.S.84)。かれは、理神論やそれに基づく釈義学、テキストクリティークの方法などを学んだだけでなく、日々の生活スタイルまですっかりイギリス的になって帰国したため、敬虔主義の空気の強いハレでは、「かれは外国で、その性格の不愉快なところだけを伸ばして帰ってきたと人々はうわさしあった」(Ebenda)と伝えられている。
- 116) Ebenda, S.85.
- 117) 石田友雄, 他『総説旧約聖書学』日本基督教団出版局 1992年,18頁。
- 118) Michaelis J.D., Mosaisches Recht, 2. Aufl.1785.1.Bd S.1.
- 119) Ebenda,S.3.
- 120) Ebenda,S.11.
- 121) Ebenda,S.17.
- 122) Ebenda,S.3.
- 123) Ebenda, 6.Bd.S.88f.
- 124) Ebenda, 6.Bd.S.164.
- 125) モンテスキュー『法の世界』第6編を参照されたい。
- 126) Mosaisches Recht,1.Bd.S.2.
- 127) Reill,op.cit.p.196.
- 128) Mosaisches Recht 1.Bd S.3.
- 129) Reill,op.cit. p.196.
- 130) ibid, p.197.
- 131) ibid, p.171.
- 132) Mosaisches Recht,2.Bd.S.388.
- 133) Ebenda,1.Bd. S.10.
- 134) この探検調査については西村三郎の上掲書が詳しい。
なお、ニープールの最初の報告書である『アラビアの記録』が出版されたのは1772年であった(同書,176頁以後)。
- 135) Handbuch,S.170f.
- 136) Reill,op.cit.p.84. また、2章第1節で紹介した人口減少の原因論のなかでの一つ、一夫多妻制が青年たちから結婚の機会を奪って人口を減少させるという議論も『モーセの律法』にみられる(1.Bd.S.20)
- 137) Weltgeschichte,S.5.
- 138) Ebenda,S.23.
- 139) Ebenda,S.27.
- 140) カッシーラー, 上掲書 240頁。
- 141) ミシェル・フーコー, 渡辺一民, 佐々木明訳『言葉と物』新潮社1993年,161頁。
- 142) ヴォルフ・レペーニス, 小川さくえ訳『18世紀の文人科学者たち』叢書ユニベルシタス365,1992年。なおかれには『博物誌の終焉』という著作もあり近々翻訳される予定であるという。
- 143) Jacques Roger, The living world, in“The Ferment of Knowledge”1980,278頁以下を参照。
- 144) レペーニス, 上掲書,52頁。
- 145) ロジェ, 上掲書,501頁。
- 146) 「一八世紀と一九世紀の曲がり角で, 実定的諸領域の体系は全体として大きく変わっている」。(フーコー, 上掲書,21頁)。